

ダウン・ツ・スカイ —
—Down to Sky——

うえうら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――「ボクはキミと生活を共にする」とにした

地上では日常を共に過ごし、空では互いに機銃を向け合う。
ずっと2人で空を飛んでいても、耳元で声を聞いても、決して触れる事はない。
彼女の手を、彼女の頬を、僕の手が触れる事はない。

静と動を意識した物語。

スカイ・クロラがお好きな方は是非。

目次

01 飛行・出会いの直前

デイスプレイが映す仮想HUDに意識を埋めると、紛争地帯であつた。バラバラとロータの回転音が耳を叩く。

ドローンは荒れた地を見下ろしながら飛行する。

半ロールで背面飛行。上が赤茶色に、下が透き通った青空に。

1週間前よりも、地上の惨状は悪化していた。コンクリ造りの建造物は銃痕や炸裂で抉れており、それを支える赤土は歪に変形している。おそらく、普通車は通れない。下はそんな状態。

それに比べ、空は自由だ。

道はないし、レールもない。信号機も標識もない。自分の好きに軌跡を描くことができるだろう。空にだけ自然が残っている。
しがらみのない澄んだ青。

見上げた自由な空にどこまでも落ちていきたい。
視界の端にレーダが映る。

感傷に浸っている場合ではなかつた。トリムを水平に修正。

接敵前の最終確認。各種計器をチェック。

回転数はパラレル。電波帯は正常。エルロン、ラダーも淀みない。

ただ、バツテリの残量は幾何いくほくもなかつた。だが、これは悪いことではない。接敵する前に、増槽を切り離すことができる。どちらかと言えば、利点だろう。

無人であれ、有人であれ、戦闘機が軽いにこしたことはない。これから踊るのだから。操縦桿——P S 4のコントローラの右ステイツク——を倒す。僅かにラダーで修正。そのまま右へ一回転。

青空。荒れ野。青空。仮想H U Dに映る視界が素早く切り替わつた。

今度は左に倒す。もう一度景色が溶ける。ロールの感度は抜群。

『楽しそうだな、リン』

ヘッドセットを通して、アーデルの英語が聞えた。専用回線を通してのS k y p e（正確にはそれをエミュレートしたもの）からだ。僕がアラビア語を使えないから、彼らはいつも気を利かせてくれる。

『まあね、先日そちらからお給料も頂いたし』そう返事をして、僕は翼を左右に振つた。彼も半口ールで答える。アズハルの僚機もガル翼を立てた。

シリアルのラッカとS県の距離でも、それほどラグは無い。

時差は5時間強。こつちが11：00時で、向こうが6：00時よつと前。

『おい、見えてきたぞ』渋い声でアズハルが言つた。ダンディな声なのに、かたことの英語だから少しおかしかつた。

僕達に、A W A C Sなんて頼もしい見方はいない。機載カメラが1km程先に、黒い点の集合を捉えた。その数、多めに見積もつて、30。

次第に距離が近づいて、仮想H U Dが補正を加える。5機編隊が6つ。やつぱり、ぴつたり30。

出来高報酬だ。腕が鳴る。人間様の操縦技術を見せてあげよう。この人口無脳どもぬ。

『ラーダビウ サマカン ワフワ フイル バハリ』アズハルのアラビア語が、僕の頭を通り抜けた。

右から左に読む言葉は聞き取りにくい。

『えーと、意味は海にいる魚を売るな、だつけ』

日本語に近づければ、取らぬ狸の皮算用つてやつだ。残念なことに、僕の口は思つたことを勝手に呟く癖があるらしい。

『そうだ、リン。気を引き締めろ。先日、アシフの息子があれにやられた。かわいそうに、彼は脚を失つた』

『クツソ、メリケンなどもは腐つてやがる。狙うのは軍人だけって決まりだろ！』
 アズハルが言うと、アーデルが吠えた。連合国軍のドローンが、罪もない女子供に何をしてきたか僕だって知っている。

腰にくつづいた義足を新しい躰だと受け入れようとする少女。伴侶の代わりに松葉杖を生涯の支えとすることになった少年。

ドローンが一つの集落をハチの巣にしたあと、悲惨な光景だけが残る。
 非生産的だと思う。

だから少なくとも僕は生産的であらねばならない。

『OK。全て荒野のもくずにしよう』

コントローラを上下逆転させ、全ての指で機体を操る。

この技術のおかげで、無課金のままレート1位を維持し続けることができた。
 ラダーを引いて、ナイフエッジ。主翼が風を切つて、その軌跡を目で追う。

アズハルのガル翼機も機体を垂直に。
 アーデルの双発機も翼を立てた。

『最初だけA3で突っ込む』アズハルの鬼気迫った声。『あとは、B5だ』

ジハード!!! 叫びがヘッドセット越しに響いた。

指示通りに、二手に分かれる。これがA3。

そして、接敵したら自由戦闘。つまり勝手にやれつてこと。これがB5。増漕をページ。機体が僅かに浮いた。

一度深呼吸。戦闘前のルーチンかもしれない。

濁つた部屋の空気が肺にまで侵入してきた。

仮想HUDをチエツク。相対距離500。3秒後にヘツドトウヘツド。
機銃の安全装置を解除。親指は今日も好戦的。
エレベータがぐんぐんと効いてくる。速度を上げて、高度をじわじわと上昇。
近づいてきた。こちらには、目算15機。
躰が緊張で震える。

舵をきつて、バンクに入れる。

滑らかに降りていく。

空気の摩擦をびりびりと感じる。

15機は単発のプツシヤ。のつぱりとした形状は見間違いようもなく、プレデターの後継機、RQ-1V。滑らかなボディは灰色で、胴体に機銃を付けている。主翼に機銃をつけないのは前身機を反省してだろう。

その機銃が火を噴いた。

まだまだ、全然早い。

エルロンを切つて反転。一度フェイントをかける。

相手が右へ切つた。

その瞬間に素早く逆へロールして、エレベータを引く。
即座に急旋回に入り、相手に接近。

射程。

撃つ。

着弾は音で確認。

僕の目は次の得物を追っていた。

ロール。

後部カメラに機影を確認。後ろから来る。
ダウン。

すぐに左へ回り込む。フラップを下げる。
もの凄いブレーキ。

本当に失速しない。

ずっと高いところで煙が見えた。

後ろを見る。

影はない。

スロットルを押し上げ、上昇。

翼を振つて、周囲を確かめた。

左から来る。

スロットル・ダウン。

すぐにアップ。トルクで右へ倒れ込む。

他の機体は？

5機ほどが素通りしていく。

残りは僕を追い回している。

後ろのやつが撃つてきた。マニュアル通りの行動。

下の一機の軌跡を見る。

再び上昇。そのまま軽くバンクを入れる。

アップを引いて、だんだん半径を小さくしていった。

ラダーを左右に振つて、エア・ブレーキ。

後ろへ回り込んだ。

上を見る。機影はない。

前の一機は左右に蛇行。

こちらは優雅にカーブを描いて追いかける。

反転して下を見た。昇つてくる5機。

前の機体によるやく追いつく。

アップを引いて、上昇しようとしている。ループに入るつもりだ。

その前に撃つた。相手の尾翼が吹っ飛んだ。

すぐに離脱。左へ倒れてターン。

下から来る。右へスライドして躲す。

撃つ。

金属音。炸裂音。

ラダーを突つ張る。

そのまま、スナップロール。

2機、僕の前に躍り出た。

撃つ。舵角を微調整、撃つ。

煙の尾を引いて、すぐ横を通り過ぎて行つた。翼が当たりそうだった。

旋回に入れて後方を確認。

機影は遠い。射程外。緩い弧を描いて、機首をそちらへ向ける。

撃つてきた。

だから、早いつて。

『そつちはどう？』僕は訊いた。

『こつちは順調だ』アズ哈尔が答える『だが、5機取り逃した』
『こつちも、すまない』僕は頬にまで伝わった汗をぬぐう。『ここを片付けてから、追い
かけよう』

『マン アジラ ナディマ』アズ哈尔のアラビア諺。

たしか意味は、急ぐ者は後悔する。急がばまわれつて奴とおおよそ同義。
『了解、お互い最適の戦闘を』

そう返事をして、Skypeから意識を切り離す。

レーダを確認。アズ哈尔とアーデルは既に5機落としていた。向こうはあと5機。
そのうち、一機が少し離れた空域にいる。管制機でもないのに、少し不穏だ。
こちらは残り6機。2機ずつに再編してから、僕に突っ込んでくる。

高度はこちらが上。

後方下に4機。こちらへ来る。残りの2機は隙をうかがっているのだろうか。
反転して戻し、反応がにぶい振りをすることにする。
どうしようか。

考える。どちらへ舵を切るか。

中途半端な距離の2機が厄介。

もう一度、後ろを見た。

やつぱり、4機。全部、敵だ。

まばらな雲と平行な高度。

左手が、スロットルを少し押した。逃げたいらしい。

4機のうち、2機が高度を揃えてきた。

ぎりぎりまで我慢しよう。

アーデルとアズハルもダンスを踊っている。

反転して真下を見た。

荒野の上に2つの機影。

いくつかの残骸があるはずだが、僕の目はそこまでよくない。カメラをズームさせるつもりもない。

2機が太陽を背にして、突っ込んでくる。

相変わらず、マニュアル通り。

しかたがない。

スロットルをハイ。

エレベータ・アップ。

機体は背面のまま急降下に入る。

トリムを調整。機体を制御。

ついてくる。

2機か。

あとの2機は左へ回った。

追いつけるか。

距離はまだ300以上ある。

エレベータを効かせる。

限界スピードに近づいた。

機体が振動する。自然に逆らった分だけ、機体は軋み、翼は捻じれようと/or>する。

僕は息を止め、仮想HUDに意識を沈める。

操縦桿を押した。

逆ループに入る。

遊園地のループとはまるつきり反対。青と茶が勢いよく混ざる。

機体が真上を向いたところで、エルロンを倒す。

フランプを半分下げる。

周囲を確認。後方の2機がまだ離れない。

もう2機は右へ。距離を置いた2機は上から来るのか。
タイミングを計つていいんだろう。

仲間を撃たないように離れているつもりかも。

スロットル・ダウン。

サイドスリップして、機首を横に向けた。

速度が落ちる。

みるみる後方から、近づいてきた。

スロットル・ハイ。

スナップをかけたように、翼が左へ振られる。

撃ってきた。

ほら、スピードが速すぎたんだ。こちらを向けない。

上からも来た。完全にずれている。

右へかわして、やり過ごす。

離れた2機を頭の隅に置きながら、僕はターンをする。

上からの2機がターンでもたついていた。

そちらへ行くと見せかけて、反対へ機体を倒す。

僕を追い越して行つた、2機を追う。

出力を上げて、ラダーで舵を切る。

入った。撃つ。

一機が落ちた。

もう一機は寸前に離反していた。後方確認。

2機つけられているが、まだ距離はある。

離反した一機を追う。

『調子はどうだ、リン？』アーデルの声がヘッドセットから聞こえた。

『今、忙しい』

『こつちは、あと3機だが、おつとと』

『そつちは、もう終わりそうだね』

『いや』少し難しい声がした。『“シルフ”が来ている。A班を壊滅させた機体だ』

『……シルフ？』プレデターを眼前に捉えてから、僕は訊き返した。

『ああ、ここ一週間、リンは出動していなかつたから、聞いてないのか』

『単位が危うかつたからね』

前の機体が翼を立てた。そのまま左ヘターン。

ラダーを突つ張つて追尾。

トリガを引く。

橙の爆発が線を引いて後方に流れた。

あと4機。

『それで、そのシルフってのは?』

『元ネタはお前の国で『戦闘妖精・雪風』って奴らしい。メリケンはSF好きが多いからな』

『へえ、確か神林先生の作品だったかな。てことは、凄腕のAIってこと』
『まあ、そんなとこ。今、アズハルとダンスしている』

『後で、空中戦のデータを頂戴』

『わかつた、そつちも急げよリン』

了解と答えて、周囲を見回す。

右上方から2機突っ込んでくる。

早くしとめる必要がありそうだ。回らずに急ぐことを決定。

さあ、来い。見せてやろう、ストール・ターンを。

上から近づいてくる。もう射程に入るか。

アップ。

上昇すると見せかけて、スロットルダウン。

景色が流れる。遠くの2機はまだ高みの見物。

右上から2機がバンクを入れてこちらへ来る。
機体が風を切つて、空気が離れる。

失速する。

フル・スロットル。

ラダーを引っ張る。

機首が横へ倒れて、くるりと下を向いた。

上からの奴が撃つたみたいだけど、弾道は高い。
かいくぐつて、一気に落ちていく。

もう舵が戻つた。

凄い！ これが多発トラクタ式の軽さと馬力。

フラップを戻す。

バンクに入れて、急旋回。

来た。

ほら、驚いている。相手は撃てなかつた。マニュアルにも、データベースにもこんな動きはないはず。

僕は瞬くくらい短く撃つ。

トリムで微修正。再度、撃つ、コンマ0、5秒。

吸い込まれる弾道。

エルロンを反対に切つて離脱。
炸裂する音が聞えた。

残すは2機。

そいつらに機首を向ける。

『ちくしょう！ やられた！』 アズハルの声が大きく響いた。

ヘッドセットを頭から外したくなるくらいの激昂。

『すまん、間に合わなかつた。オレが仇を討つ』 声に混ざつて、ギリリと歯噛みする音も聞こえた。

アーデルは、丁度2機を片付け終わつたところだつた。

レーダを見る限りはそうだ。

『あと、2機やつつけてから加勢する。できれば、それまで落ちないで』

『言われるまでもない。アズハルの機体はアリームが片足を代償に鹵獲したものだ。シルフつて奴を落としてやる』

アーデルも激昂した。

僕もいい気分とは言い難い。

エレベータを引き、機首を上げる。

速度を全開。向かうは上方の2機。

02 妖精の軌跡・掲示板での出会い

「——兄さん！」

「リン兄さん！ 大学行きますよ!!」扉越しに妹の声がした。

何度も自分のことを呼んでいたのではないだろうか。ボリュームはそれなりに大きくなっていた。気づけば、時刻は11:30をちよつと過ぎている。

僕はSkypeを一度オフにした。それでも、意識は上方の2機から逸らさない。

「今、忙しいから先に行つてて」

「はあ!? 兄さんは何回留年する気なんですか」

「だ、大丈夫だつて、今年こそは必修しつかりとるから。……それで、ノートをお願いしてもらつてもいい？」

「はああ」扉越しでさえ聞こえる、わざとらしいため息。「本当に、兄さんは頭が悪いですね。妹と同学年なんて恥ずかしくないんですか？ ゼミも一緒ですし、立場が無いのは私なんですから」

「いやあ、本当にごめんね」仮想HUDに意識を埋めながら、僕は上の空で返す。

「まあ、私の学費も生活費も兄さんに出してもらつてるので、あまり強く言えないんで

すけどね。それでも早いとこ卒業した方がいいですよ。大学7年生』

「わかつて、わかつて。それにまだ6年生だつてば」

「本当に分かっているんですか？　お昼は学食で待つてますから、それまでに来てくださいね』

「はいはい、いつてらっしやい』

「では、いつてきますね、』

階段を下る足音がぱたぱた響く。

一度も顔を合わせることなく、妹は家を出た。

一度深呼吸。全神経を仮想HUDに巻き戻す。SkypeをON。

上方を飛ぶ2機になかなか距離が縮まらない。というより、むしろ離れていくばかりだ。エンジンの性能差があるらしい。だが、何故、逃げるのだろうか。理由は定かでないが、追えぬ敵を追つてもしかたがない。

『これ、きっと届かない。どうすればいい、アズハル』
『アーデルの援護を頼む、リン』

『了解、全速で向かう』

そう答えて、可変ピッチの角速度を調整。

旋回半径を最小に、機首を反転。

景色が混ざつて、後方に流れて、消える。

『リン、早く来てくれ。これ、本当にA-Iかつてくらいやばいぞ』

『距離は3000、ちょっとかかるかも、最悪逃げてね。アーデルのが一番性能がいいんだから』

『オーライ。オレはそつちに向かうから、バトンタツチを頼む。任せるぞ、エース』

『任された！ 出来高報酬の非常人員だけどね。アーデルは抜けて行つた10機をお願い』

『ラジャ！ 相対距離1000。3秒後に、オレは機首を上げてループする』

レーダをチェック。目視で確認。

“シルフ”との角度差は0。

真正面からのヘッドトゥヘッド。

あと、4秒で相手は撃つ。

1, 2, 3。

ピッチャップ。

右にロール。

銃の軌跡を撫でるように、機体が横転。

かすめるように、機体がすれ違う。

相手の機体が一瞬で消える。

か。

くるりとシャープな旋回で、相手は機首を真っ直ぐにこちらへ向ける。僕もそちらへ機首を向けた。

再度接近。

一秒撃つた。

反転、離脱。

相手も撃つた。

数メートルで再びすれ違う。

フル・フラップで急旋回。

相手も既に旋回に入っている。
速い。

本当に、A I か？

相手は左後方で立て直していた。
かなり機敏だ。相当な腕前。

判断がコンマ1秒早い。その一瞬が何よりも尊いのだ。

右手に力が入った。

すぐに、旋回に入れて、大きく回り込む。

こういう場合は正攻法でいくのが良い。

相手もそう考えたのか、ほぼ同じ半径で回り始める。

キヤノピイがしつかりと見えた。向こうからもこちらが見えるだろう。

黒い球体に、一対の羽。

妖精のように、柔らかく軽やかな軌跡。パイロットの一つの理想形が体現されてい

た。

同半径の旋回。

我慢比べ。

しごれを切らした僕は、

エレベータを引いて、ループを入れる。

シルフは逆ループで僕の後ろに着いた。

僕は高さのアドバンテージを、奴は後方というアドバンテージを選んだ。

もう少し小さく回つてみる。

まだついてくる。

咄嗟に反転して、逆ヘターン。
続いて、エレベータをダウン。

再び、逆ヘエルロン。
ラダーを突つ張る。機載カメラで後方確認。

ブレデターが少し離れた。

スロットル・ダウン。

フラップを下げる。

急激にブレーキがかかる。

エルロンを倒し、急反転。

エレベータをハーフ・アップ。

機体が軋んだ。

一瞬のスナップ・ロールで向きが変わる。

スロットル・アップ。

加速する。

シルフの後方へ。

自分の鼓動、自分の血流を意識して、
速く、速く、速く、と押し上げる。

判断よりも速く舵を切る。

考えるよりも速く振り下ろす。

見るよりも速く予想する。

速度は限界に近い。

ほぼ真下を向いている。

プレデターはターンに入った。

こちらもそれに続き、追い上がる。

シルフは旋回方向を変えた。

洗練された動きだ。

僕は、少し我慢してから、操縦桿を倒した。

一瞬だけフラップを使う。

機体が振動した。

エンジンは唸る。

やつとシルフに追いつく、と思つたら、上へ逃げられる。

インメルマン・ターンだ。

人間なら失神したに違いない。

右に旋回して、軌跡を確認。

もう一度最初から。

すれ違う。綺麗なダンスだ。

すぐにエルロンを逆へ倒し。スロットルを切る。
エレベータをフルアップ、そして戻す。

ストール寸前でラダーを右へ。

シルフはもうターンしている。速い。

嬉しくなつた。

スロットルを押し上げる。

フラップを使って、姿勢を維持。

それを戻して加速する。

小さなターン。

反転。

ラダーを切つて、機首をスライド。

R1ボタンに中指をかける。

射程。

撃つ。惜しい。

可変ピッチ修正。

舵を切らずに、機体を制御。

射程。

撃つ。

コンマ3秒。吸い込まれる弾道。

甲高い金属音。

主翼の右が吹っ飛んだ。

『ヒヤツホウ!!』思わず叫んだ。快哉を叫ぶとはこのこと。

黒い煙が尾を引いて、地面へと螺旋を描く。

『やつたか!?』アーデルも叫んだ。

『やめておけ、アーデル。それはたしか、日本ではフラグと言うんだ。マン サカタ サ
リマ』アズハルはそう窘めるも、抑揚のある気分の良い声音だつた。

ちなみに、沈黙するものは安全である、という意味のアラビア諺だ。口は災いのもの、
あるいは沈黙は金という諺に近いのだろうか。

勝利の余韻に浸るため、落ちていくシルフへと距離を詰める。一般に、煽りプレイと
呼ばれる行為である。

これがいつもオンラインゲームなら相手は顔を真っ赤にするかもしれない。

悪あがきだろうか、奴は機銃を乱射していた。

人口無能が悪があがき？ それとも煽りが気に入らないのだろうか。だがはたして、感情を持たない戦争の代行者がそんな人間的なことをするだろうか。

ダダン、――、ダン、ダダン、――、ダン。

よく聞けば、乱射ではないような気がする。リズムがあるような、ないような。

不規則なようで、規則的。

トン、ツーを思わせる響き。

というか、まさにそれだ。モールス信号。

“Listen”

確かに、そう聞こえる。

その通信規格に倣つて、こちらも機銃を噴かせる。

“OK”

『何をやつている？ リン』アズ哈尔が訝しげに聞いてきた。

『ジルフがコンタクトを取つてきた』

『それは、本当か』

『たぶん、本当』

『こちらの情報は漏らすなよ。後で、会話内容を送信するように』

『OK、アズ哈尔』

S k y p e で会話している間にも、シルフは機銃を鳴らし続けていた。

" 4 c h a n S F 6 9 2 - 3 2 7 I w i l l w a i t "

高度は400、そろそろ限界に近い。シルフはこのメツセージを繰り返していた。機体が地に落ちて、爆ぜるまで。

その直前、僕は機銃を鳴らした。

" I s e e "

片翼の妖精は僅かに翼を揺らした。よう見えた。

天翔ける妖精、シルフを撃墜した後、僕はアーデルと共に残党を殲滅した。

ほとんどをアーデルが片付けていたため、僕がやつた仕事は少しだけだつた。残党狩りが終わつて、ドローンを自動帰投モードに。

3人でちよつびり反省会。人的被害を出さなかつたことが、なによりだつた。

2人にお礼を告げてから、S k y p e を終了。

今回のスコアは12。"正"の印を2つと "T" 印を1つホワイトボードに書き込んだ。ええと、これで合計は232。時計を確認、時刻は12:20少し前。

熱いシャワーを浴びて、戦闘の記憶を胸に溶かし込む。滑らかな機動を何度も脳内に描き、澄んだ空に線を引く。シルフの機動はとてもA-Iのそれとは思えなかつた。僕達

みたいに、人間が遠隔操作しているのではないだろうか。さもなければ、A班を壊滅なんて芸当はできないだろう。今回だつて、地に落とされたのは僕の方かもしけなかつた。

だけどそれ以上に、シルフとの空中戦は楽しくて、嬉しかつた。レート1位を取つたときだつて、こんな高揚感は覚えていない。

すぐさま、4chanを覗こうと思つた。だけど、すんでのところで凪との約束を思い出した。もし行かなかつたら、Lineの未読が99になりかねないので、おとなしく大学へ向かうことにする。

電車に揺られながら、Excelで報告書を作成。

コンタクトレンズ状のデバイスが、個人端末のディスプレイを空間上にAR（拡張現実）してくれる。その仮想型ディスプレイの前で、僕は指をせわしく走らせた。僕の目にしか映らないので、その機密性はノートPCよりも高いだろう。

駅から出て、レンタサイクルに足をかける。3度くらいの緩やかな上り坂を汗が出ない程度に急いだ。自転車は飛行機よりも、よっぽど無駄がない。最高効率の乗り物は自転車だと言つたSF作家は誰だつたろうか。

考へているうちに、学生会館へ到着。ドミノ倒しをしたらさぞ愉快な駐輪場へ自転車をつけて、ドミノに仲間入りさせる。

サークル呼び込みの看板を横目に一号館へ向かう。

「無いですよ」学生食堂に入ると、凧が手を振つて迎えてくれた。手の動きに合わせて、肩口まである流しつばなしの黒髪が僅かに揺れる。「応用数理統計の講義、再来週にテストですって」彼女は僕に近づいて、紙片を突きつけてきた。「必要無いかもしませんが、一応これ、今日の分のノートです」

大学にいるときの凧は僕のことを見ると呼ぶこともない。かといって、名前を呼ぶこともない。だから会話の中で主語が消えがちになる。けれど、凧の話し相手の9割り、いや9・5割りは僕なのだからさして問題ではない。

ブラコン・シスコンが許される年齢はいつまでなのだろうか。
少なくとも、二十代の兄弟が仲良く二人暮らしていることの気持ち悪さと、それに対する世間の目を僕と凧は知っている。

異常かもしれない。けれど僕には凧が必要だと思う。
妹無しでは大学7年生になりかねない。

「ああ、ありがとね」手渡されたA4紙には丸文字が浮かんでいた。

「出席数が足りないとテストが受けられないんですから、来週は絶対来てください」「わかつてるつて、何も予定が入らなかつたら——」

「予定が入つてもですよ」口を斜めにして凧が言つた。

食券を買つて、兄妹で並んで、蕎麦をすすつた。化学調味料がぶち込まれた安っぽい味だけど、そんなに嫌いじやない。なんというか、人間にのために作られた味。

「あのさ、4限のゼミ出れないから、教授によろしく言つておいて」

「はああ!! 何回休むんですか。教授は毎回のことみたいに許してますけど、今日、発表の順番ですよ」

「資料は共有ストレージにアップ済みだから、凧に代わりをお願いできないかな。教授には僕から伝えておくから」

「はあ、またですか、別にいいですけど」彼女は箸を置いて、人差し指で長方形を描いた。おそらくPDFをARしたのだろう。「へえ、『量子アニメーリング』を活用してのディープラーニング』ですか。ゼミ入つてからずつと人口知能ですよね。もう何年目なのでしょうかね。ちなみに、これは嫌味です」

ため息をついてから、凧は蕎麦をすすつた。心なしか、彼女はゆっくりと食べているような気がする。2人で食べ始めたら、2人で食べ終わる。そんな謎の不文律が僕達の間にある。

「で、質問なんですけど——」

「箸で人を刺さない」

「で、質問なん——」

「七味を勝手に人のにぶち込まない」

「で、質問——」

「コショウはもつてのほか。——

「酱油もO U T」

機先を制して、僕は凧の右手を掴んだ。彼女はニッと笑って、首だけをこちらに向けた。

兄妹じやなかつたら、バカツブルに見えるかもしれない。

「失礼しました。で、今日は何で休むんですか」

「4chanを、あつ、いや、違うよ、親戚に不幸があつてそれで」

「へえ、かわいい妹に代理を任せて、自分はネットサーフィンですか。良いご身分になられましたね。というか、そのいい訳は出来が悪すぎて、突つ込む氣すら起きません」

割り箸が折れるかと思つた。そういう黒い笑みを凧は浮かべていた。

兄妹同士で親戚の不幸もあつたもんじやない。それに悼むような親類はいない。

バキリ、と音がした。あ、折れた。しかも、片手で折りやがつた。

「違うつて、これも人工知能の研究の一環なの。教授には4chanだなんて、言わない
ように」

「まあ、そうですね」凧は一度ここで止めてそばつゆをすする。「そう言うなら、そう理

解しておきます。くれぐれも私を先輩にしないでくださいね」

彼女はそう告げてから、両手を合わせた。僕もそれに倣つた。

結局、昼ご飯を食べに大学にいったことになる。

豪華な時間の使い方をしたものだと電車に揺られながら反省する。

改札を抜けて、刺すような日差しに思わず空を仰ぐと思考が切り替わった。

シルフに会いたい。

心躍らせた強敵と再会するべく、僕は走つた。仮想型端末でアクセスしても良かつたけど、掲示板を覗くならやつぱり自分の部屋が落ち着くだろう。
 少し躰を動かすと、6月のじとじとした空気が肌に纏わりついた。空に飛び立て、風を浴びたい、そんな気分を覚える。

"4chan SF 692-327 I will wait"

モールス信号の通信規格に乗せて、シルフはそう残した。

ブラウザを立ち上げて、4chanのSFスレッドの692スレ目を開く。レス番号327まで、スクロール。

そこには、ディープ・ウェブ（検索エンジンにかからない領域）のDNSが記されていた。そのため、TOR（IPアドレスの秘匿を可能にするブラウザ）を立ち上げる。ヤフー や グーグル の スパイダーボット に ひつかから ない 領域へ アクセス。もちろん、

S S Lで暗号化を行つておいた。支払いをビットコインで受け取つてるので、僕はしばしばディープ・ウェブを使つたことがあつた。断つておくけれど、薬物や違法ポルノに手を出さない限り、ディープ・ウェブへアクセスすることを咎められはしない。

チャットサイトが1つ現れた。

クリック。

“名前を入力してください”

ブラウザにメッセージボックスが現れた。90年代初期を思わせる簡素なデザインだ。

リンと入力、エンターキイ。

『遅い』——シルフ

チャットルームに入るや否や、文字が躍つた。

脊髄反射的に僕はキーを叩く。既視感にも似た不思議な核心があつた。

『負けたくせに、偉そうなやつだね』——リン

恥を恐れずに言うと、僕はネット弁慶だつた。

シルフとカタカナで表示されていたことに一抹の不安を覚えるも、僕は強気な姿勢を崩さない。

『そもそもどうして僕を呼んだ』——リン

『ボクにキミの技術を教えて欲しい』——シルフ

『人にものを頼むときの態度』——リン

『キミの飛行技術をボクに教えてください』——シルフ

この素直さは何だろうか。

『教えてもらえる技術は、自分が飛ぶために必要な技術ではあるけど、自分が飛ぶ事と同じではない。全然違う』——リン

キーを叩くにつれて、既視感が核心に変わっていく。オンラインゲームのチャットでもこれと似たようなやり取りをしたことがあった。

『ただでとは言わない。3年と29日前にも言つたはずだよ。無課金にして、レート1位を守り続けた伝説のネットランカー、リンリン』——シルフ

『え、リンリンって』——リン

『そうだよ、もうキミも気づいたんじやないかな、ボクだよ。アカウント名はフェアリイ』——シルフ

フェアリイっていうと、あいつだ。一時期、僕に粘着し続けてきた、課金厨。それでも実力は本物で、奴もレート2位を維持し続けてきた。いや、時々3位とか4位に落ちたことがあつたような気もする。

『仮に、僕に報酬があつたとしても、教えることのできない技術なんだから、どうしよう

もないと思うんだけど』——リン

『たしかに、無制限曲技飛行の世界チャンピオンのユルリス・アイリスは「俺をみて感じろ、教えられることはそれだけだ」って言っていたね。その教えに従つて、僕もキミのフライトを何十回と繰り返し再生して、記憶領域に焼き付けた。そして、シミュレーションを繰り返した。空気力学の演算も容量が許す限り試行した。でも、結果はあるのさま』——シルフ

『じゃあ、得るものは何もないんじゃない』——リン

『いや、思うに、心の不存在がこの原因だと結論している。心や感情が無いから直観が働かない』——シルフ

『え？ 心の不存在って何さ？ なんで、いきなり中二病っぽいこと言つてんの』——リン

『心の不存在は本当のことだよ。向上心、つまり目標値への再帰的なフィードバック処理と、心あるいは感情は別物だからね』——シルフ

『は？ 心が無いってサイコパスのつもり？』——リン

『広義のサイコパスにA.I.が含まれるのなら、そうなんだろうね』——シルフ

『はあ！? A.I.だつて？』——リン

『そうだよ、コードネーム“シルフィード”通称シルフ。ボクは有機系戦闘コンピュート

タだ。あるいは、課金厨のフェアリイ』——シルフ

そういうえば、アズハルはシルフのことをA.I.だと言っていた。でも、スカイ・コンバット・オンラインのフェアリイまでA.I.だったとは。

たしかに、シルフの言葉づかいは若干奇妙な気配がある。記憶領域、容量、演算（コンピューターショーン）、比喩表現だと思っていたが、文字通りの意味らしい。

そして、人工知能もしくは人工無脳の学術サーバイを行つたことのある僕は、感情の発生というブレイクスルーが、研究室レベルでも未だ確認できていないことを知つていた。

『でさ、心の不存在がシルフの負けの原因だとして、それをどう解決するつもりなの？

』——リン

『キミと生活を共にすることにした』——シルフ

『いや、答えになつてないんだが』——リン

『ボクは感情をするために、進化論的シミュレーションを探ることにしたんだ』——シルフ

『なるほどね、進化論ね』——リン

『本当に納得してる？ 日本人特有の知つたかぶりかい』——シルフ

『失礼な。情報工学科だつてば』——リン

『へえ、キミのことは生年月日からアマゾンの購入履歴まで知っていたけれど、大学生活のことはさっぱりだつたよ。情報工学とは期待してよさそうだね。それで、進化論的シミュレーションについてなんだけど』——シルフ

『生物淘汰というよりも選択淘汰みたいなものでしょ。ヒューリティクスを働かせて、突然変異が出てそれが優秀だったら進化の産物だつていう手法。人間の言語も生物淘汰の産物だしね。心や直感（のように機能するもの）もそれで発声発現できるんじやない』——リン

おそらく進化論的シミュレーションは心や魂といった理解することのできないものを生み出すのに最適なプロセスだ。

進化論的シミュレーションの面白いところは、それが単純なソートプログラムであつても仕組みを完全に理解することができないところにある。にもかかわらず、そのプログラムは人間が組んだものよりも8倍速くデータを整頓するのだ。信じがたいかもしれないけれど、この種の進化論的に製作されたプログラムは完全だと数学的に証明されはいる。でも、仕組みの理解はできない。進化がソートプログラムのような単純なものを誕生させることができ、なおかつ、我々がそれを本質的に理解できないということであれば、我々が人間の脳の仕組みを理解することに期待は寄せられない。

つまりどころ、本質や構成が分からずとも心や直感は生まれる可能性があるのだ。

ソートプログラムよりもずっと複雑だろうけれど。

おそらくシルフを形成する関数は並列コンピュータ上でコンマ数秒ごとに新しく生まれ変わっているはずだ。自分と自分（ダツシユ）を戦わせて数えられないほどの屍を生産しているだろう。そして、プログラム集団は世代を重ねることに成績の平均値を上げていく。こないだ将棋の名人に4タテをくらわしたソフトもこの手法で作られている。

『手法はいいと思うよ。でも手段が良くないと思う。何さ、一緒に生活するって』——リン

『せつかく環境の変化という刺激を与えるなら、目標値が近くにあつた方が良いと判断した。それと淘汰される母集団をよりキミに近づける必要があるだろうからね』——シリフ

『一緒に生活するって言つても、A-Iとなんて無理じやないかな』——リン

『明日、最寄りのセブンイレブンに行つて、そこで荷物を受け取つてほしいな』——シリフ

『どうもこのA-Iは自分の要求だけを突き付けてくるきらいがる。え？　僕を参考にしたつて。

『まあ、明日は土曜日だからいいけど』——リン

『じゃあ、そういうことで、感謝するよ、リン』——シルフ
『その感謝って言うのは?』——リン

『関係を円滑にするためのメソッド。べ、べつに心からの感謝ってわけじゃないんだからね。……そうそう、これはたぶんジョークってやつね。ベイズ統計が選択肢を表示したんだよ。キミはこういうゲームも好きなんだろ』——シルフ

『へえ、そう』——リン

僕は無関心を装つたレスをしたけど、水分を口に含んでいたらデイスプレイを汚していたに違ひなかつた。

『あまり面白くなかったかい』——シルフ

『いや、そんなことはない。明日何が届くか分からぬいけど、取り敢えず、期待しておく。あと協力はさせてもらうんだけど、一つ条件がある』——リン

『いいよ。僕の目的に反しなかつたらね』——シルフ

『研究を手伝つてほしい。今年こそ卒業しないと大学7年生になつちやう。少し大掛かりな計算が必要なんだ』——リン

『それなら明日届く荷物を楽しみにするといい。下手な並列機よりよっぽど早いと思う。ああ、すまない、忘れていた。荷物は着払いだから、キャッシュを持つて行くようにね』——シルフ

『ええ？ アメリカ様の国防省か何かなんでしょ。 予算はジャブジャブなんじやない
の』——リン

『これはほどんボクの独断なんだ、だから予算申請をできない。すまないね』——シル
フ

『へえ、まあ、大丈夫。お金には困つてないから』——リン

『では、また明日。今日のドッグファイトは最高だつた』——シルフ

『じゃあ、受け取りに行くから。うん、確かに最高だつた』——リン

“シルフが退出しました”

メツセージボックスがブラウザに現れた。

僕はチャットルームをTORのブラウザごと消す。すこしだけ名残惜しい。学術め
いた話よりも、操縦技術とか空戦技術の話をしたかったのかもしれない。

進化論的シミュレーションの復習をする必要がありそうだ。本棚を見ると仰々しい
表題の本が数冊あつた。

手につくか不安である。

頭は明日への期待で埋め尽くされている。

思わず太陽が昇る東の空を見た。

窓枠からはみ出さんばかりの飛行機雲が伸びていた。

案外あれに、シルフの荷物が乗っているかもしねない。

03 荷物・実際の出会い

半口ール。

上がボコボコの荒野になつて、下は澄み渡つた空。
眼前、距離500に黒い点。

400、300、相対距離が0へと寄る。
機銃の安全装置を解除。

射程。

撃つ。相手も撃つた。両方外れ。

ピッチを上げる。

ロール。

いわゆる、バレルロール。

相手も左右対称に、同じ機動をとつた。
お互ひがキヤノピイを向けてすれ違う。
ボンネットに黒いマーキング。

黒い球体に、一対の羽。

シルフだ。

さあ、どう来る？

奴は急上昇する。それを横に見ながら、僕も上へ向けた。
ループに入ると見せかけ、逆に背面でさらに上昇か。なるほど、なかなかの腕前だ。
軽く斜めに躱して、こちらはアウトサイド・ループ。

ツイスト気味に踊つてから、右へ反転して切りこんでくる。かなり危険なコースだ。
僕はダウンで一瞬修正してから、右ヘロール。アップ。そして、四分の一のストール・
ターン。左へ逃げると見せて、右下。そして、さらに背面からインメルマン。
だんだんピッチが上がつてくる。

向こうも上々だ。

面白い！

コブラ・ツイストっぽいフェイントから、ダイブ。
計器を確認。可変ピッチローターは釣り合っている。
スロットルを絞り。スナップ・ロール。

軽い。

一瞬手前で止めて、背面のまま突つ込む。

シルフがちょうどロールしたとき、アップを引いて、下から接近。

気がついてロールした。アップ。

「腕を上げたね、フェアリイ」僕は言う。

ダウンドリンクを追う。

ストールで躲す気だろう。

フラップを下ろしているはず。

さあ来るぞ。

彼の機体が上を向く。

僕もエレベータを引く。景色が追い越していく。

ニュートラル。ラダーで修正。

斜めに滑っていく。

トルクを微妙に使った。

今だ。

エレベータを引いて。

スロットル・ハイ・

正面にシルフのプレデーターを見た。

射程。

撃つ。

可変ピッチ修正。プロペラ後流で、舵角の変更。
コンマ1秒撃つた。

離脱。

シルフの機体の主翼の左が吹っ飛んでいた。
失速し、そのままくるくると回った。

墜ちていく。

『ありがとう、楽しかった』

声は聞いたことが無かつたけど、これがシルフの声だと直感した。

錐もみのまま、ずっと下へ落ちていく。

『さよなら、リン』悲しげな聲音。

斜めになつて、僕は追いかける。

真下は荒野だつた。爆発と銃撃でボコボコに抉れている。そこへ、シルフの機体が近づいていく。くるくると風車のように回りながら。

『最後に、キミと会えてよかつた』

『おい、シルフ！』僕は叫ぶ。

最後つて何だ？

どんどん落ちていく。撃つたのは僕だ。

『心残りがあるとすれば、キミの顔を見られなかつたことくらいかな』

『シルフ!!』

黒い点が、荒れた赤土の中へ吸い込まれていつた。
急に音が聞えなくなる。

躰中がしーんと冷たく凍つたようになつて。
震えだした。

「シルフ……」

声も。

赤土の荒野を見ているはずなのに、目を開けると、暗い天井が目の前にあつた。
ぬるい湿度、を感じた。

湿つた髪が頬に張り付いた。べつとりと汗に濡れていた。

呼吸は荒い。息づかいを意識して、心臓が唸つていてことに気づいた。
起き上がる。

時計は4：00。

PCをスリープから復旧。

TORブラウザを起動。吸い込まれるように、突き動かされるように、一件のチャット
サイトへ。

くだん

リン、と名前を入力。

クリックで、入室。

『なんで、チャットルームごと閉じたの？』——シルフ
すぐに、文字が躍った。

僕は安堵をついた。昨日のことは夢ではない。

『シルフが退出したっていう、メッセージが出たから』——リン

『やつぱりあれが原因だったのか。それでは、と言う発言とチャットからの退出がマクロ領域でつながっていたんだよ。だから、退出してしまったんだ。あれつきり、キミからのコンタクトが無くて、ええと、人間風に言うと、不安になつたんだよ。嫌われたかもしれない、と』——シルフ

『その、嫌われたっていうのは？』——リン

『目標値への障害、を感情みたいに表してみた。それで、目標値への違いをこれから改めるようにする。こうやって、ファイードバックを繰り返して、学んでいくように僕は作られている』——シルフ

『へえ、まあ、そうだろうね。ところで、荷物ってのはいつごろ届くの』——リン

『ちよつと、待つて、今トレーサビリティを調べるから』——シルフ

少々時間がかかりそうなので、僕は着替えることにした。パジャマは汗でぐつしより

だつた。脱衣所に行つて、部屋着のスウェットを身に着ける。大量の汗が躰の水分を奪つていたらしい。渴きを潤すために、蛇口からぬるい水を飲んだ。落ちそうな目蓋をこすりながら2階に戻つて、ディスプレイの前に座る。

チャットサイトには吹き出しがいくつも増えていた。

『今、神奈川の集積所にあるつて、届くのは日本時間の10:00頃だと思う』——シルフ

『ねえ、返事が遅いんだけど』——シルフ

『やつぱり、ボクのこと嫌いになつた?』——シルフ

『所詮A-Iだから、コミュニケーションが苦手なのは自覚しているよ。でも、感情を手に入れる前に、それを十全にこなせっていうのは、あんまりじやないかな』——シルフ

『ねえ、本当にいのいの』——シルフ

『ダメな部分があつたら指摘してくれればいいよ。パーソナリティを崩さない程度には修正するから』——シルフ

『あのさ、どうしても、返事をしないならボクにも奥の手があるんだよ。できれば使いたくないし、キミを脅すようなこともしたくないんだけどね』——シルフ
アメリカ国防省が作成したA-Iの最後の脅し。まつたくぞつとしない。

僕は急いでキーボードを叩いた。

『ストップ、ストップ!!』——リン

『遅いよ。心配したんだから』——シルフ

『その心配っていうのは?』——リン

『目標値との違いが大きくなるかもしれない、その危惧を表している』——シルフ

『へえ、なるほど。あとさ、チャットで一方的に連投すると、メンヘラとか、ヤンデレとか、言われるかもしれない。これは一般的にあまり好まれないから、気をつけた方がいい』——リン

『ふむ、なるほど。ヤンデレは知っているけど、メンヘラは知らなかつた。あとで辞書検索して、データベースに登録しておくね』——シルフ

『ちなみに、その脅しっていうのは?』——リン

『一番軽微なものはキミのTwitterのアカウントを使つて、今までのAmazonの購入履歴を晒すこと。一番重いものは……これは聞かない方が良いと思うよ』——シルフ

『OK。聞かないでおく。万が一、軽微なものであつたとしても、脅しがあれば僕はシルフに一切協力しないから』——リン

『大丈夫だよ、冗談だから』——シルフ

『A.I.の冗談は信用できないつて(笑)』——リン

『よし、第一段階クリア』——シルフ

『え、それは何?』——リン

『親密さの大まかな指標のこと。マニュアルによれば、顔文字、絵文字、あるいは草が使われたら、それなりの信頼関係があるつてことらしいよ』——シルフ

『なるほどね、国防省でさえ、親密さなんて定量化や定性化できないものの扱いには頭を悩ませているらしいね』——リン

昨日のサーベイ資料を思い出しながら、僕はタイピングしていた。気づけば、あくびも漏れていた。だつてまだ、4:30にしかなつていない。

昨日寝たのが25:00だから、ええと、寝た時間は、ええと。
ダメだ、頭が働いてない。目蓋が重い。

『ごめん、寝落ちする』——リン

そうとだけ、キーボードを叩いて、僕はベッドに戻った。ディスプレイを確認するには、僕の生理的欲求が強すぎたようだ。

後になつて知つたけど、チャットサイトには30程の吹き出しが投下されていた。

「あれ? 兄さん、外出ですか」
首を傾げて、凪が言つた。

彼女はリビングで本を読んでいた。紙媒体の本。2022年でも、紙の香りを求める人は大勢いる。多少高くとも、環境に悪くても（本当に悪いかは定かでない）需要があれば作られるらしい。

凧が読んでいるのはアイザック・アシモフが著した、ロボット工学3原則がテーマのSF。ドローンが人を殺している場面を何度も見てきたので、僕はまつたく笑えなかつた。

「ちよつと、そこまで」玄関を指さして答えた。

「兄さんが休日に外出なんて珍しいですね。今日は銀行屋さん休みですよ」彼女は本を閉じて、こちらに向き直った。「まさか、人と会うんですか？」

「いや、セブンイレブンに荷物受取にいくだけ」

「あら、そうなんですか、できれば雪見だいふくを買って来てください」

「わかった、わかった、6月の割に暑いからね」

「溶けないうちに、帰つて来てくださいね」

靴を履きながら、凧の声を聞いた。

玄関を出て、二輪駆動自転車に乗る。やっぱり、降りる。荷物が大きかつたら、敵わないでの、リスク回避。

駅へと続く、アスファルトの道を歩くこと10分。ロジステイクスネットワークをさ

らに発展させ、コンビニ最大手の地位を独走し続けるセブンイレブンに到着。セブン独走の背景にはP≠NP問題の解決があり、大規模問題を扱う物流業界は怒涛の勢いで進歩し続けている。ゼミの教授はそれに一枚噛んでいる。僕も8分の1くらい噛んでいる。

調子の良い入店音が耳に届く。レジに立つバイトさんが笑みを作ってくれた。
 マイナンバ（印鑑でも可）を提示して、受領書を記入。重量は70ポンド、キログラムで表すと約32キロ。国際郵便の料金表に従つて、20,000円弱を支払う。やら大きなダンボールに、割れ物注意のシールが張り付けてあつた。100×100×50くらいの体積だろうか。インドア派の僕にとっては、それなりの仕事だと予想される。

肩が外れるかと思うほどの重量感。雪見だいふくが溶けかねないので、タクシーを拾つた。初乗り料金だけで済んだのは、幸いであった。

「凧ー！ 開けてー！」両手が塞がつていたので、年甲斐もなく玄関の前で大きな声を出した。

「はい、はい。今、そっちに行きます」凧の声が聞こえると、玄関がスライドした。「うわ、やたら大きな荷物ですね。何が入っているんですか、兄さん」

「開けてくれて、ありがと。うーん、開けてみるまでのお楽しみだと思う」

「へえ、誰が送つて来たんですか？」そう言うと、凧は首を傾げた。

「おそらく、アメリカから」

「誰からですか？」

「ええと、僕のバイト関連だから特に誰っていうわけじゃないよ」

「なるほど、兄さんのお仕事関連ですか」凧は一度頷いてから、流しつばなしの黒髪をくるくると弄つた。「それを聞いて安心しました。パツキンに染めようかと少しばかり思案したんですよ。…………冗談ですってば、兄さん。固まらないでくださいよ」

「はい、はい、ブラコンもほどほどに」

「あ、兄さん、雪見だいふくが溶けちゃう前に、早く食べましようよ。丁度2個なんですね」僕の腕にかかるビニール袋を指さして凧は微笑んだ。

「いや、これを開けなきやいけないから、凧が全部食べていいよ」

「私一人じゃ食べきれないですから」

別に一度に食べなくてもよいのでは、そんなニュアンスの言葉を残して、僕は2階の自室へ向かつた。

スプリングの利いたベッドに、32キロのダンボールを置く。ベッドが軋む音を聞きながら、僕は部屋の鍵を閉めた。緑色のガムテープを無造作に剥いでいく。まるで、プ

レゼントを前にあがあがとしている少年みたいではないか。

ダンボールを開くと、ひと回り小さなダンボールと、発泡スチロールの梱包器が入っていた。

蓋に手をかけ、発泡スチロールの方を開けてみる。

ノートパソコン、50TBの外付けハードディスク（ムーアの法則におどろくばかりである）、コンタクトレンズ、片耳のヘッドセットが入っていた。

何から始めればよいのか分からなくなつたので、シルフに訊くことにする。せっかくなので、送られたノートパソコンを使ってTORを開いてみよう。

コンセントに繋いで、電源ボタンに触れる。起動するまでの間、もう一つのダンボールを開けようと試みる。硬めガムテープと僕の指が格闘する。

ピロティロピロティロ、と何やらサイケデリックな起動音。Windowsの音でもないし、ましてやMacの音でもない。謎のOSだった。

不審に思つて、ディプレイに視線を向ける。デスクトップは真っ青な空の壁紙。

“Sylpheed”と名の付けられたアイコンが一つだけあつた。そのアイコンを指でタッチ。投影型静電容量方式が昨今の主流である。マウスカーソルが砂時計に変わつた。

座して待つこと5秒弱。

画面が一度暗転。次に、白く変わった。

“はじめましてだね、リン”

画面に文字が浮かんだ。インターフェースはADVゲームやギャルゲーのそれだつた。画面の下部六分の一がメツセージウインドウになつてゐるようだ。はじめまして、シルフ、僕はそうタイプした。だが、ディスプレイには反映されなかつた。どうしようかと考えがえていると、

“ヘッドセットを頭に付けて、電源を入れてみて”

再び、文字が現れた。

言われるがままに僕は動く。装着して、カチリと電源ボタンを押す。ブーンと重低音の起動音。

「よろしくね、倫之助」

鈴が鳴るような澄み渡つた合成音声。その声音は薄雲のベールみたいに透明だつた。

今朝の夢で聞いたものにそつくりで、僕は驚いた。

それ以上に、僕の下の名前がばれていて、本当に吃驚だ。

04 シルフが家にやつてきた

「倫之助つていつから知つた？　あと、これからはその呼び方は禁止で」
ヘッドセットのマイクに向けて僕は言った。

「知つたのは昨日だよ。キミの住所を調べている時に偶然。まさかAmazonのアカウントにもリンを使つているとはね。ボクは倫之助つて名前、悪くないと思うけどな、ほら、純日本人つて感じでしょ」

ヘッドセットを通してシルフの透明感のある声が伝わつた。その自然な発生は5年ほど前のVocaloidやSoftalkと比べるべくもない。最近はあまりに人間的な発生に逆に嫌気がして、昔のミクやレンが再ブームを迎えていた。どこにだつて懐古厨が一定数存在するらしい。

「倫之助は野暮つたいから、今まで通りのリンでお願い」
この呼び方は凧からもらつた大切なもののので、自分の中では一生これで通そと決めていた。

「リンリンがそう言うなら——」
「リンでお願い」

「わかつたよ、リン。発泡スチロールの中にコンタクトレンズが入っていると思うから、
ちょっとそれつけてみてよ」

「OK。ちょっと待つてて」

返事をして、僕は自分のコンタクトレンズ型デバイスを外した。手馴れた動作で、保存液に入れる。そして、フィルムケースほどの大きさの容器に入った新しいコンタクトレンズを取り出す。

「これ、分厚くない?」ツルツルとしたそれを指に乗せて、僕は訊いた。

「うん、普通の仮想型端末用のコンタクトよりは厚いと思う」

「人体に影響は?」

「直ちに影響はないと思うよ。米軍が使用しているやつと同じだから」

「へ!? 何でそんな大それたものを」

「おっと、動搖しても壊きないように。セットで20万円くらいするから」

「20万か……。丁重に扱う」

僕の手をトランプタワーでも扱うかのように、慎重になつた。自分が3万円程なので、手元のこれはよっぽど良質なのだろう。

「そのコンタクトは網膜走査機能がついていて、キミの視覚情報を僕に送つてくれるようになっている。電波強度が小さいから、キミの頭にヘッドセットが着いてないと、そ

の機能を十分に保てないけどね』

「ふむ」僕は一度頷いた。「小型カメラじゃダメなの?』

「それは良い質問だね、リン。カメラじゃ目の焦点がどこに向かっているか分からないんだよね。米軍の特殊部隊はそれと人口眼を使って、視覚共有をしているんだ』

「なるほどね」コンタクトレンズを両の目に装着する。普段のやつよりも、厚みがあるので、少しの異物感を覚えた。酸素透過性は一定水準を超えているのか、若干心配であつた。

「あ、つけたみたいだね」はしやぐようなシルフの声。「ねえ、早く鏡を見てみてよ」「げ、気が進まないなあ』

寝不足のクマがあるので、あまり人に見せられる顔にはなつていらないだろう。重い足取りで、洗面台に向かつた。

「59!」シルフが言つた。

「なにさ、その数値は?』

「リンの顔面偏差値。サンプルが10万人才オーバだから、それなりの信頼度があるよ』

「はあ!? 失礼とか思わないの? まあ、でも、パーセンタイルに直せば、上位20%には入つているのか、あまり悪い気はしないかも』

シルフが無邪気に数字を言い放つのは、彼に心が無い故だろうか。初対面の人々に顔面

点数を告げる奴なんて、そう多くない。というか、心というよりも社会性の問題ではないだろうか。いや、それも心があればこそ生まれるものだろうか。

「ああ、心配しないで、もし50以下だつたら、偏差値は言わないつもりだつたから。ベイズ統計が言うには、その長い前髪を切つて、目のクマを取れば、あと2くらい偏差値は上がるつて」

「へえ、なるほど、やっぱり長いよね」僕は前髪をついと引つ張つて伸ばし見てみる。鼻の下まで達した。真ん中分けにしてなかつたら、相当邪魔だろう。

「へへ、リンつてこんな顔なんだね」

「これが59の顔ですよ」

「うん、いいと思うよ。見ることができて、ちょっとだけ嬉しいんだ。だつて、ずっと前からボクはキミの後を追つていたんだからね」

「ずっと前つて言うと、あのオンラインゲームの時からだよね」

「うん、そうだね。あの時から今でもずっと倒すべき敵だし、超えるべき目標だし、お手本でもあるから」

目標とかお手本とか言われると、少しだけむず痒かつた。素人がリンリンTueeeと言うのとではわけが違う。相当な実力者から手放しでほめてもらえれば、そりや気分が良い。

「さつきの嬉しいっていうのは？」

「うーん、たぶん。ファイードバック情報を精査するための目標値が、少し明確になつたのだと判断しているよ」

「へえ、なるほど、目標ね」

「顔が分かつたからといって、それが飛行技術にどう関係するのか定かでなかつたが、僕は取り敢えず納得してみせた。」

「よし、これでボクはキミと同じものを見て、同じものを聞くことができるつてわけだね」

「まあ、一応そうなるのかな」

耳に付けたシルバのイヤリングの感触を確かめて、僕は呟いた。これ（幸い穴を空けるタイプではなかつた）が小型集音マイクになつてゐるらしい。

「ねえ、ところで、僕のプライヴァシーは？」不意に尋ねてみた。

「それなんだけどさ。ここで得られたデータは責任もつてボクが処理するよ。一応スタンダードローン管理だから、本国の研究者にも渡さないようできる」
やつぱり、いまひとつシルフは人間の心を掴めていないような気がする。
「まあ、それは当然として、僕とシルフの間のことを訊いてるんだけど」

「あ、失敗した。それは全く考えてなかつたよ。リンは嫌だよね、自分の見るものがAIに簡抜けになるなんて。でもね、キミの情報は統計的に処理するし、恣意的に扱わないから勘弁してもらえないかな」

「ねえ、そういえば、シルフって僕のAmazonのアカウント知つてあるんだよね。それクラッキングだよね」

「ああ、ええと、それは悪いことをしたと思つていいよ。でも、キミに不利益を与えるつもりはないから、その点は安心して、統計的に処理するから大丈夫」

「つまりは、Amazonがビックデータに基づいてオススメ商品を紹介するくらいにしか、キミは僕のことを思つてないわけだ。あるいは自分のことをその程度にしか認めてないんじゃないの？ まるで、システムみたいだね。……自分のことを一個の確立した人格と見ないで、どうして感情や心が生まれるっていうのさ。ねえ、シルフ」
少しの静寂。

シルフは僕の問いに答えなかつた。エラーでも、フリーズでもないと思う。

「ねえ、何とか言つてみたら？」

「……リンはボクをシステムじやなくて、一個の人格として扱つてくれるつてこと？」

「……まあ、そうなるのかな。ずっと前から、キミがフェアアリイだった時から、僕はそ

感じていたし、これからもそのつもりだから」

「あ、ありがとう。べ、べつにこれは感謝つてわけでも、嬉しいつてわけでもないんだからね。そうそう、これはジョークだから」

「分かつてるつて、A.Iの冗談は信用ならないことくらい」

「でさ、結局プライバシーの問題はどうするの？」ヘッドセットから穏やかな声がした。

「まあ、それは一旦棚上げでいいや。ただし、僕が仕事をする時は一切の感覚共有を禁止にするよ。そうでもしないと、I.S.I.Sの戦友に申し訳が立たない。それに、僕がドローンを操るときに視線を盗み見られたら、とてもじゃないけど敵わないから」

「うーん、まあそれは仕方ないか。倫理的にもよくないよね。キミが交戦しているときは本国とオンラインにする。ボクは実力でキミに勝たないといけないからね。でも、一番はキミがどんなふうに考えながら機体を操っているか知りたかったんだけどな。まあ、だからこそ、そこのダンボールを送ったんだけどね」

「へえ、何が入ってるのさ？」

「兄さん、そんな大きな荷物持つてどこに行くんですか」

リビングから顔を覗かせて風が訊いてきた。テーブルには『戦闘妖精・雪風〈改〉』が

置いてあつた。タイムリーだなと僕は驚いた。

「ちよつと、川原まで」返事をしてから、声量を絞つて声を出す。「えつと、彼女が妹の嵐。どうする紹介した方がいい？」

「え、リンって妹さんいるの？ だつて、戸籍見たけど——」

「長くなりそだから、紹介は後回しね」

「兄さん、こそこそと独り言を呟いて、どうしたんですか」

「いや、何でもない。夕ご飯までには帰るから」

「昼が蕎麦だつたんで、夜はソーメンですかね」

嵐の声を後ろに聞きながら、僕は玄関を開けた。

チャーハンだつたから、今度はピラフですね。マフィンだつたから、ベーグルにしますよう。ソーメンだつたから、次は冷麦にしましよう。これらは彼女の得意技だ。

ダンボールを抱えて、20分ほど歩いた。中途半端に舗装された川原の道はペツトの散歩やジョギングに利用されている。その道中、土手に座つて携帯ゲームを遊ぶ子供が見えた。どこにいてもオンライン通信ができる便利な時代。

それを横目にもう少し歩く。川面が運ぶ少し冷えた空気。肺の中がクリーンになつた気がする。

礫が敷き詰められた川原に到着。ダンボールから機体を取り出した。

個人端末を操作して、空戦用アプリを起動。コンタクトに仮想HUDを表示。コントローラと機体の操作系を同期。

スロットル、エルロン、ラダー、フラップ、四つの舵の操作方法はいつものジャバード（最近になって知ったけど、自由という意味らしい）と変わらない。

制御系、位置座標系、をチエツク。異常なし。

電気系統をチエツク。異常なし。

僕は空を見た。

風はない。沈殿したような空気。

西の空が、赤く染まるらうとしていた。

エンジンを始動。

癖のないシンプルな立ち上がり。

単発のエンジンが噴き上がり、徐々に回転数が上がる。

回転翼は力強く空気を刻んだ。

土埃が舞つた。丈の長い草がざわざわと鳴る。

ブレーキを解除。

スロットルをゆつくりと押し上げていく。

単発機独特の反動トルクが来た。

アスファルトの橋の上を走る。

ごつごつとした振動周期。機載マイクが拾つた。のつペリとした主翼。きっと、たくさん武器が積めるのだろう。人を効率的に殺すため作られた機体だ。

エレベータを引く。

浅い角度で離陸した。ランディングは20mもあれば十分だった。

脚を仕舞う。滑らかに上昇していく。

八分の一 プレデターが空に舞い上がった。

左右にロールをして、エルロンの感触を確かめる。思ったほど重くはなかつた。機銃が載つていないためだろうか。

ターンをする。スリップは申し分ない。

水平飛行して、トリムを合わせた。ほとんどピッタリ。新品の機体でもなかなかこうはいかない。

「すごいね、リン。プレデターは初めてだよね？」

「うん、単発。ツッシャを飛ばすのは初めてかな」

「ねえ、ちょっと曲芸飛行やってみてよ。ユルリス・アイリスみたいなやつ」

「ユルリスさんって、僕の父さんの師匠なんだよ」

「え、ユルリスさんって、お弟子を一人しかとらなかつたよね。その方が事故つたからだ
そうだけど。でも、名字が——」

「ヒントは妹」

「あ、そうか、本当にごめん。どうか、気を悪くしないで」

「いや、父さんのことは大分前の話だから、別に気を悪くする必要はないよ」
自分でも何でこんなことを言つたのか分からなかつた。これじやあ、気にしていると
言つて いるようなものじやないか。

僕はもう一度空を見上げた。

浮いていれば、飛んでいれば、忘れられる。薄情かもしけない。

コントローラを逆持ちにする。

エレベータを引いて、ループを入れる。

旋回半径を徐々に小さくしていく。

川面と赤い空が交互に映つた。

咄嗟に反転して、逆ヘターン。

続いて、エレベータをダウン。

再び逆ヘエルロン。

ラダーを突つ張つて、後方を覗く。今は敵なんていないので、完全に癖になっていた。
操縦桿を倒して、ロールを3回。

右へのロールを止め、後ろを見る。だから、癖になっているんだって。

エレベータをダウン。

フラップを上げる。

スロットルを押し上げた。

エレベータをニュートラル。左へエルロン。

ハーフ・フラップにラダーを加えて、ターンした。

右へ反転。

機首を真下に倒す。

背面で降りていく。

操縦桿を引いて、川面と水平に。風圧で、水柱が立つた。だが、機体には追いつかな
い。

そのままロー・パス。

どんな曲技よりも、ロー・パスが一番難易度が高い。

地面が近いってのはそれだけで、危険の条件だ。

橋のアーチをくぐつて、低空でインメルマン。

半口一ルで、背面。

軽自動車のおじさんがこつちを見た。いつになく、僕の目は冴えていた。

逆ループで、もう一度くぐる。

「す、いよ、リン！」

いきなりの声に、身がすくんだ。

僕は完全に機体にのめり込んでいた。

「何か、リクエストは？」

「じゃあ、カイリスさんの一連のマニューバを」

いいよ、と答えて、スロットルを押し上げる。

エンジンが唸る。

機体が軋む。

空気が主翼から剥離。その一瞬、

フランプを戻し、速度がさらに増す。

風を切る音。

気持ちが良い。

気が遠くなる。

そして……、

思い出した。

父さんが空に描いた軌跡を。

滑らかで、柔らかくて、

鋭くて、細くて、

しなやかで、屈強な、

洗練された軌跡を。

全然忘れてないじやないか。

僕は小さく苦笑した。

ループ系、ロール系、サークル系、コブラ系、ナイフエッジ系、ストール系、一通り
披露した。

空は茜色の少し手前まで、進んでいた。

「ねえ、おにーさん。あれ、おにーさんが飛ばしているの？」

真横から幼い声がした。

自分の腰辺りから、澄んだ声は聞こえていた。

「びゅーんつて、すごくかっこいいね」

純真な瞳は空を駆ける機体を追っていた。

いつかの自分を見たみたい。

「トリムを水平にして、自律飛行モードに。」

「少年もやつてみたいかい？」

「うん！ やつてみたい！」 演劇とした声だった。

「そしたら、ゲームソフトを我慢するといい。そして、お父さんに頼むんだ。いいかい、間違つてもお母さんに頼んじやだめだからね」

「うん、ゲームも我慢する。そして、パパにお願いする」

「そしたら君も、僕達の仲間入りだ」

僕は少年の頭をくしゃくしゃと撫でた。正に、かつての自分がここにいた。

最後に、ナイフエッジで目の前をロー・パス。

風圧で僕と少年の髪が舞いあがる。空気の振動が耳を痺れさせた。

少年は笑顔を浮かべていた。サークルを見た後の笑みではない。真っ直ぐな瞳は空の自由を知っていた。

八分の一プレデターをダンボール箱にしまって、帰り道を行く。

「リンつて、小さい子共好き？」 シルフが唐突に訊いてきた。

「いや、特に」

「あれ、でも、Amazonの注文履歴を見ると——」

「違う、2次元と3次元は全然違う」

こいつはやっぱりプライバシーという概念を理解していない。

ため息まじりに、空を見上げた。

赤と紫が混じる茜色。ジェット燃料が勢いよく燃える色に近い。爆発が刻んだその色は僕の脳裏に今もこびりついて、離れてくれない。地上での出来事はどうにも僕を縛り付ける。

“これでお前も、俺達の仲間入りだ”

3DSを封印した僕に、父さんはドローンを与えてくれた。10才の頃だった。それからは、父さんが事故るまで毎日のように飛ばした。メンテナンスを怠つたために、今では置物になつている。

05 シルフと妹

僕と凪は斜向かいに座つて、やる気のないソーメンをすすつた。学食の蕎麦と違い、咀嚼するたびに小麦の風味が口の中に広がる。妹は慢性的に上機嫌な笑顔をさらに輝かせていた。蕎麦派ではなく、ソーメン派なのかも知れない。

ハリのないそれをもくもくと口に運ぶ。

食事が終わる頃、水に浮かぶソーメンはすっかり疲れきっていた。

「で、兄さん、言いたいことつて何ですか？」箸を置いてから凪は言つた。

「ええと、一緒に生活する人が増えました」その端の先端を見て僕は答える。

「はあ!? どういうことですか」彼女は目を大きく開いた。「彼女を作つた何て聞いてないですよ！」

言い終わるやテーブルに拳を叩きつける。表面張力で、そばつゆはぎりぎりこぼれなかつた。

「シルフ、僕の端末をスピーカーフォンにしたから、ここからお願ひ——」「へえ、シルフちゃんつて言うんですか、兄さんを誑かした不貞なやつはたぶら」「えつと、リン。これどういう風に説明すればいいかな?」

スピーカーフォンにしたにもかかわらず、シルフはヘッドセットを通して訊いてきた。

「あ、そうだ、僕が I S I S のパイロットやつてることは内緒にしてね」「了解したよ」

僕がひそひそ声を出すと、シルフもそれに合わせてくれる。

そんな僕は訝しんで、凧はテープル越しに身を乗り出してきた。白磁のように白い手を伸ばす。それが僕の右耳に触れた。

「そういえば、兄さんの耳に見慣れないアクセサリがついていますね」黒い笑みを浮かべて、僕の耳をぐいと引っ張った。「へへえ、これをシルフちゃんから貰つたんですか。私がプレゼントした指輪はつけないのに」

「い、一応これはシルフから頂いたものだけど、断じて彼女ではありません。というか、性別も実はよくわかつていなかつたり」

「え、それは心外だよ、リン。ボクは一応、女性のつもりで接してきたのに」

「こ」ぞとばかりにシルフはスピーカーフォンで発声した。当然、凧は黙つていなかつた。

「に、兄さん、誰なんですか、そのシルフって子は!?」

「ほら、自分で説明して」

「ええと、リンと大体24時間共に生活することになりました。シルフといいます」

「え？ に、兄さん、嘘ですよね」声を上擦らせて、凧は言つた。「わ、私というものが
ありながら」

「シルフさん、重要な所が抜けてるんじゃない？」

「あ、そうだ、ボクはA.I.だよ。だから、たぶん凧さんが心配しているようなことは起こ
らないと思う」

僕は何も言わずに、頷いた。というか、凧もシルフの声で気づくべきだ。いくら技術
の進歩が目覚ましく、不気味の谷を容易に超えたとはいえ、まだ人間のそれとは質が異
なるのだから。

「あ、なるほど、そうですか。人工知能なら一安心ですね？ ……いえ、やっぱり、何と
なく危険な香りがします」

「おそらくその心配は杞憂だよ。ボクにはまだ心や感情が無いから、凧さんが危惧する
ようなことはたぶん起きない気がする。それに、凧さんはすぐ美人だかね。だつて、
6.2だよ」

「へ？ 6.2って何がですか」

「凧さんの顔面偏差値」端的にシルフが言つた。

僕は正規分布を頭に思い浮かべ、指を折つて計算する。

「ええと、パーセンタイルに直すと上位14%くらいかな」

「へえ、私ってそれなりに美人さんなんですね」凧はくるりとこちらを向いて微笑む。

「兄さん、よかつたですね。こんなにかわいい妹がいて」

「いや、まあ、悪いことではないけど。——シルフ、これで自己紹介は済んだね?」胃に穴が空きそうだったので、僕は一刻も早く退散したかった。

「うん、ボクからはもう何もないよ。これからよろしくね、凧さん。ボクの事はシーチやんでも何でも、好きなように呼んでくれて構わないよ」

「こちらこそよろしくお願ひします。それと、私の呼称も名前だけで結構です。ちなみに、シーチさんは何で兄さんと24時間一緒に過ごすんですか?」

凧は首を傾げてぶりっこぶつたが、その目は全く笑っていない。目だけが西洋人形みたいな感じ。

「ええと、ボクはプレ——」

「シルフ!」

ドローンの操縦士だという事が漏れかねなかつたので、僕は思わず声を荒げた。

「あ、ええと、ボクはリンのことを4年前からずっと見ていて、その頃から僕達は一緒に遊びあう仲で、リンの隣でなら心や感情が見つけられると思つたからかな」

「へえ、兄さんこれはどういうことですか。私に黙つたまま、ずっと隠していたんです

ね」

シルフの言つたことに嘘偽りは全くなかったのだが、その言は火に注がれる油であつた。やはり、シルフは人の心の機微に鈍い。

「ち、違う。シルフは友達であり、ライバルなようなものだから」僕は顔の前で手を振つた。「そういう対象じや全然ないから。あ、そうそう、僕のバイト関連だから」

「そこまで言われると、それはそれでやだなあ」ヘッドセットからシルフの声がした。当然これは僕にしか聞こえていない。

「まあ、兄さんのお仕事関連なら、そういうことにしておきましょ。——これからよろしくね、A-Iのシーちゃん」

凧はA-Iという部分をやたら強調して言つた。彼女のそんなところがちょっとだけ気に障る。僕は個人端末を手で包んだ。

「うん、よろしくね、凧」シルフが言つた。

「じゃあ、バイトの準備があるから部屋に行つてるね、凧」

僕は逃げるよう、そそくさと階段を上る。

重そうなドアを開けて、部屋の中に入った。

自室に帰還して、サムターン状の鍵をしつかりと閉める。僕は、ようやく安堵のため

息をついた。

スイッチみたいに気持ちが切り替わる。

まずは確認しておくべきことがあつた。

「えつとさ、シルフが女性つてのは本当？」

「まあね、生物学上での性別はないけど、性自認は雌だよ」

「自認つてことは自分で選んだんだよね。どうして？」

「ボクにとって、あるいはA.I.にとって、態度つてものは所詮インターフェースなんだ。関係を円滑にするためのメソッドに過ぎない。だから、きっと、性別もそう。もしかして、雄だと思つてた？」

シルフの声のトーンは平坦だった。

どれだけ味気ないことを言つているのか、彼女は分かつてゐるのだろうか。

「うーん、一人称が“ボク”だったからなあ……」僕は窓から外を見て、少し思案する。どうにも、思い当る節があつた。「え、もしかして、“ボク”っていう一人称は？」

「あ、今更気づいたんだね。リンのAmazonの注文履歴を分析してみたら、いわゆるボク娘が多かつたからだよ。とりあえず、好かれるにこしたことはないと、ベイズ統計が判断したんだ」

「じゃあ、もし、僕が頼めば……？」

「え、『私』とか、『あたい』とかの方が良かつた？ もしかして、ご主人様とか呼ばせたかつたりする？」

「いや」僕は顔の前で手を振った。「せつかくシルフのパーソナリティが出来つつあるのに、それを崩したくはない。興味本位で変なことを聞いてごめんね」

「ううん、いいよ。リンはそんなこと頼まないって分かっていたから」

そう言われると、なんだかこそばゆい。

「ねえ、とこでさ」僕はベッドの縁に腰かけた。「シルフにとつての目標とか、ゴールはどこにあるのさ」スプリングが僅かに軋む。

「戦果を叩き出せるA.I.になること、これが軍事的な目標」

「だつたら別にさ、僕に負けるくらい大したことないんじやない」

「いや、そうでもないよ。ゆくゆくは全てのドローンをボクが操縦するようになるんだ。そして、プロジェクトが進めばすべての戦闘機をボクが操るようになる。そうすれば、軍人さんが飛行機に乗る必要もない。だから、ボクには強さが必要なんだ。それで、心や直観を求めているつてわけ」

「なるほどね」僕は小さく頷いた。確かに、有人飛行より無人の方が圧倒的に効率が良い。燃費が格段に違うし、そして何より、流れる血が減る。「じゃあ、少し話題を変えて、意識のハードプロブレムの問題は？」

「それは疑似問題に過ぎない。イージープロブレムレベルでA-Iの問題は解決できる、とボクの生みの親は何度も繰り返していた」

「まあ、そうだね。ボクも還元主義者だから、魂の存在なんて信じてないよ。人間の意識活動も物理法則が支配する現象と複雑な演算に依っている、そう理解している」

「そう、だからボクは君達人間がサルを卒業したときと同様に、進化論的手法を用いることにしたんだ。ついでに言うとね、ボクに残された時間はそう多くない。だから、キミの隣にやつてきたんだ」

表情が見えないため、どのような思いが込められているか定かでないが、シルフのその声は切実な響きを持つていた。

「まあ、軍事的な部分は分かつたよ」僕は首を縦に振った。続けて、8分の1ドローンに視線をやる。「でさ、シルフは何で飛びたいの？ これはパイロットとして大事な質問だと思う」

「効率よく敵を落とすため」

「空が綺麗だと思うことはある？」

「晴れている方がボクの機体は得意かな」

「飛行機の軌跡を美しいと思うときはどんな時？」

「効率よく、敵機を撃墜するとき」

「何でシルフは僕に粘着し続けた？」

「ボクよりもリンの方が効率的だつたから」「飛んでいて、楽しいと思うときは？」

「ファイードバック処理が上手くいって、以前より効率的に飛べたとき。これがきっと、人間的な楽しいに近いと思う」

純粹だ、と僕は思った。

軽いもの、澄んだもの、真っ直ぐなものだけが空に浮かんでいられる。地上のごたごたの上澄みが空だから。

余分なものを抱えた奴は雨雲みたいに濁つて落ちていく。

腕の立つパイロットはみんな純粹でクレイジイだ。

僕の父さんは魅せることに文字通り命を懸けた。Gによるレッドアウト——眼球の毛細血管の充血・破損——を防ぐため、血管を細くする手術を行うほど、彼は空に殉じていた。そら、妻にも愛想を尽かされるわけだ。

シルフもかなりクレイジイだ。どう考えても、敵国のパイロットに教えを乞う奴はない。効率的に飛ぶ、その一心がシルフを動かしている。もつとも、それは目標値への再帰的ファイードバック処理の連続でしかない。

それでも、そんなシルフを羨ましく思った。

操縦桿を引いて躰を横に倒す。
やわらかいスプリング。

そのままベッドに寝ころがつた。棚へ手を伸ばし、適当にマンガ本を取る。表紙には、布面積の少ない服を来た少女がいた。

「リンの趣味をとやかく言うつもりはないよ」ヘッドセットから声がした。「もう、知つてるしね」

「うん、そうか」僕は力なく呟いた。

気が咎めたので、それを無造作に本棚へ戻す。仕方なく、妹から借りた『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』を手に取つた。A I の前でこれを読むのは不謹慎だろうか。誰かが見ているというだけで、ふわふわと落ち着かない。念佛みたいに文字は通り過ぎていつた。

「リンつてもつとストイックだと思つてた」

本を開いてから数分経つて、シルフが呟いた。

「どんなイメージだったの」

「昼もなく夜もなく、飛行機の練習をしているイメージだった」

「そりや、残念」僕は葉を挟んで本を閉じる。「期待に沿えなくて、悪かつたね」

「いや、別に、本を読むのも楽しいよ」

「本を読んだことあるの？」

「いや、読んだことはないけど、シェイクスピアとかだったら、データベースにつまつて
る」

「へえ、なるほど……」

電子辞書かよ、と内心でつっこむ。メルヴィルとか、スタンダールとかも入つてそう
だ

うーん、と声を出して僕は伸びをした。躰がゆっくりと弛緩する。

「せつかくだからシルフの反省会でもしますか」

「やつたね、そこなくっちゃ。今、昨日の空戦の映像をMP4で送るね」

4脚の椅子に座つて、僕はノートPCをスリープから復旧させた。

フライトの反省ができるのは現代ならではだろう。WW1やWW2の頃では、自分の
判断の誤りを悔やることはできても、それを次に生かす機会はおそらく皆無であつたは
ず。詰め込んだノウハウを次につなげることなく、散つてしまふ。そんな勿体ない時代
であつたに違いない。

「いや、特に言う事ないよ、ある意味シルフの軌道は理想に近いと思う」

仮想HUDを前にして、僕はどこを見るでもなく呟いた。呟いたというよりは、感嘆

のため息と言つてもいい。

「ええ、もつとまじめに分析してよ」

「だつてさ、旋回速度も最適だし、空気抵抗が最小になる舵角だし、翼が空気から離れる瞬間を知つている人の飛び方だよ」

「でもさ、キミには負けたじやんか」

「まあ、いわゆる、直観が勝敗を分けたんじやない。それこそ、飛び方なんて教えられるようなものじやないんだから」

「それを言われると、言い返せないんだけどね。——あ、ちょっと待つて、本国から連絡が来た。——ねえ、リン。3日後シリアのラツカで戦闘があるみたい」「それ、僕に教えてよかつたの？」

「あ、あちやー。ええと、さつきのはバグだから、後で修正しておく」「自分のせいじやないみたいに言つて……」

その時、ヴウウと音がした。

個人端末のヴァイブレーション。メールの通達だ。

送り主はアズハル。

「シルフ3分だけ、視覚の共有をオフにして頂戴」

メールの内容は案の定だつた。3日後に、作戦行動。その前夜にブリーフィング。

任務内容は拠点防衛の対空地上支援だつた。

「ねえ、リン聞いてよ。半有人機撃墜の戦果が認められて、今回ボクに5機のプレデータが与えられたんだ」

「うん、よかつたね……」僕は微笑みを作つた。

半有人機撃墜つてのはアズハルのことだ。

きっとシルフは効率的に人を殺す。

今までも、そうしてきたのだろう。

あの女の子も案外シルフがやつたのかも。

評価関数に従つて空を飛び、目標を見つけてトリガを引く。

機械でも人でも関係なく引き金を引く。

効率的に引き金を引いて、すぐに離反。

そして、半ロールで背面。

ラダーを切つて、サイド・スリップ。

意識を切り替えて、

次の獲物を探す。

標準にいれて、機銃に手をかける。

撃つ。

なんだ、僕と全然かわらないじやないか。

僕はくすっと笑つた。

「どうしたの？」

「ううん、シルフのこと」

「全く心当たりないけど」

「いいのいいの」

「よく分からぬけど、今度は負けないからね」

「え、ああ、そうだね、また落としてあげる」

3日後、シルフと踊れる。僕はもう一度笑つた。

背泳ぎの選手がスタートするときのように、ベッドに倒れ込む。
少しづつ布団が温かくなつて、自分の体温を教えてくれた。

06 再戦・空戦

風が強い。

空には雲一つない。

視線を上げるだけで、眩しさに目眩がしそうだつた。

回転翼がピッチを刻む。淡々としたリズム。

主翼が風を切る。

水蒸気が線となる。目で追つて、視界の端に僚機が映る。

すっかり馴染みの仲間となつた2人だ。

右側にはアーデルの双発のトラクタ。

見慣れない単発のプッシャが、左側少し後方にあつた。

『アズハル、その機体は?』

『これか?』

『そう答えて、彼は機体を左右に振る。『これは開発部がメリケンの捕虜を脅して作らせたらしい。足の小指を切り飛ばしてやつたら、素直に従つたそうだ』

『プレデターの残骸を組み合わせて作ったものらしいぞ』

ヘッドセットから聞こえるアーデルの声は平坦だつた。紛争状態の前に国際法も何

も関係ない。物理が至上の法となつていた。シンプルで、こつちの方が好みかもしけない。

エルロンを倒して、半ロール。

赤土が上になつた。機銃に耕されていた。

太陽の位置はほぼ真上、シリアのラツカは正午に近い。

燃えるような日の光が、コンクリ造りの建物をギラつかせている。白く塗られた石作りの家屋は爆弾の投下で半壊状態。

空に比べ、地上は荒れ放題だ。

逆回りで、半ロール。

エルロンの効きは軽やか。

雲一つない空。

透明な青。

乾いた大気。

純粹な空。

見上げた青に落ちてしまいそうだ。

回転翼に合わせて、口笛を吹く。サビの一部だけを、何度も、何度も。

これから大規模な戦闘があるだろうに、僕の心は落ち着いていた。

『索敵機がP-4地点でLocustを捉えた』アズハルが早口で告げる。『手筈通りオレがやる』

言うや否や、彼はバンクに入れて、右へ旋回。

大出力のエンジンを吹かせ、みるみる黒い点となつた。

『一人で大丈夫か？』軽い調子でアーデルが訊いた。

『アツサブル ミフターフルフアラジ』アズハルはアラビア諺で返答した。

忍耐は幸福の鍵という意味の諺だ。

Locust（イナゴ）は米軍のドローン戦術の一つだ。創世記にもあるように、紀元前から蝗害に悩まされたこの地に対して、その名を冠する兵器を使うことはあてつけ以外の何ものでもない。

Locustシステムの最大の特徴はその膨大な物量にある。自走式ロケット砲台から40に近い小型ドローンが発射され、それらが空中で散開し、携えた機銃の火を噴かせ、兵士と言わず地上に生きるもの全てを襲う。

民間人への攻撃を嫌うアズハルがこの役目を断るはずがなかつた。

仮想HUD上に、中央管制からのログがずらずらと滝のように流れしていく。

それらは重要度ごとに色分けされており、赤が最重要、青が些末な出来事を意味していた。

『A2地点で対空支援要請』赤文字の内容を僕は読み上げた。『じゃあ、ブリーフィング通り僕がやつてくる』

拡張タブをタッチして、ログから詳細を覗く。塹壕で作られた拠点に連合軍のヘリが向かっているらしい。輸送用か攻撃用かは定かでない。

『じゃあオレは空対空だ』アーデルは双発機の翼を立てた。『早いとこ、こっちを援護してくれよ、エース』

『だから非常勤だつてば』

『それでも、お前はシルフを落としたエースだ。そういうえば、またシルフは出るのか?』

』

『さあ、どうだろう』僕は肩を竦めてみせる。『僕には分からぬ。でも、きつと出るんじやないかな』

半分嘘をついた。今回の侵攻にシルフは5機来るのだが、僕は打ち明けなかつた。僕とシルフはお互いの情報を互いの陣営に漏らさないと約束していたからだ。

『まあ、そうだろうな』彼は軽く機体を振つた。『ここ2週間出ているようだし。もしも現れたら、前回の借りを返してやる』

『へりくらい早く片付けて援護してやるつて』

『取つといてやるから、早く来いよ』

双発機がバンクを入れて左へと滑る。

エルロンを倒して、僕は右へ旋回。

後部カメラに映る彼の機体は流れ星みたいに消えていった。

仮想HUDのレーダをチェック。

ポイントまで距離1500。

エンジンはフル・スロットル。

空の青が流れ、地面の赤茶色が溶けていく。

距離700。前方の4つの点が段々と形を成していく。

ツインロータ式の攻撃ヘリだつた。ミリオタじやないから、名前は知らない。
向こうの機銃は上に向かないだろう。あるいは、それに苦労するはず。

ピッチを引いて、高度をかせぐ。

エンジンが息をついた。

そして、唸る。

背面に入れて、ダイブ。

半ロール。

ラダーでスライド。

ヘリはいやいやするみたいに身を捩つた。

レクティルを合わせる。

トリムで微修正。

串型多発機の身軽さに比べたら、ヘリコプターなんて鉛のつまつた風船だ。
機銃の安全装置を解除。

射程。

1秒撃つた。

頑丈そだつたから、いつもより多め。

メインローターがぶつ飛んだ。

それを視界の端で捉える。

ピッチ・アップ。

フラップで急旋回。

機体が僅かに軋む。

もう少し、フラップ。

ラダーを突つ張る。

滑るようにエアブレーキ。

射程。

僕の右手が撃つ。

吸い込まれる弾道。

コツクピットが弾けた。

ガラスが飛び散る。

景色に流されて、混ざつて消える。

舵をきつてダウン。

滑らかに降りていく。

半ロール。

上方確認。

ヘリの腹が見えた。残りは2機。

不快な振動。

テールロータに煽られる。少しよろけた。

エレベータを倒す。

中途半端な角度で急降下。

僅かに錐もみ。高度200。

後部ローラの出力を上方修正。

瞬間、前方の三発も噴かす。

スロットル・アップ。

ヘリの横つ腹が前方に。
息を止める。

撃つ。

銃撃の反動。

即座にトルク・コントロール。

トップ・ラダーで、スナップ・ロール。

風で飛ばされた葉っぱみたいに、機体が舞つた。
ラダーを半分切る。

機首をコントロール。

射線上にテールローラー。

R1を軽く押す。

1Fのラグで機銃が瞬く。

エルロンを倒して、半ロール。

背面で、確認。

螺旋を描いて、ヘリは地上へ。

敵影なし。

オレンジの炸裂。

爆発音は引き伸ばされた。たぶん、ドップラー効果。ティロリロリンと電子音。

S k y p e の入室音だ。

別窓を A R (拡張現実) して、入室許可をタップ。僚機との通話をオフ。

『シユクラン リン!』 Q2 抱点からの通信だつた。

まだ幼さの残る、男子高校生を想起させる声音。聞いたことがある声。たぶん、アハド君だ。

『アイイ ヒドマ』僕はありがとうに対し、どういたしましてと答えた。

『?

おそらく父さんは上手くやつているか、というニュアンスの質問。

僕は横目でレーダを見やる。Locust は 10 機ほどその数を減らしていた。

『キミとキミの家族を守るために、勇敢に戦っている』アズハルの息子へ向けて、僕は英語で返した。

『よかつた……』彼は安堵のため息を漏らす。『自分だけ落とされた、仲間が手に入れた大切なものを台無しにしてしまった、とひどく悔やんでいたから、心配していたんだ。――えっと、これは、父さんには内緒だからな』

マイクの感度は良好だ。ぽりぽりと頬をかく音も伝わってくる。

『わかつた、言わないよ。それと、アズハルもキミのことを心配していた』
『えつ、父さんも——』

銃声。

それがかき消した。

肉の弾ける音。飛散したそれらが地に落ちる音。

銃声。

残響。

S k y p e の音量制限がなければ鼓膜が破れていただろう。

地面を穿つ激烈な音。火花が飛ぶような石の碎ける音。

間断のない機銃掃射。

紛れもなく、プレデターの破壊音だった。

アハド君の声はもう聞えない。

慌てて、レーダへ目を向ける。

敵影を表すマーカはない。

もともと、型落ちしたものを修理して使っていたんだ。W W 2の遺物の性能なんて、
たかが知れている。

エルロンを倒して、ラダーを引く。

急旋回。

フル・スロットルでＱ2拠点へ。

「リン、再戦だね」

個人端末から合成音声。

前方の黒点へと、カメラをズーム。

間違いなく、そのシルエットはプレデーターだった。
ただし、黒に染められていた。ステルス機かもしけない。

キヤノピの後部には、黒地を切り取る、白い球体と一対の羽。
妖精のよう、機体は滑らかな線を描く。

ズームを解除。

相対距離500。

電圧、バッテリ量、モーター温度、電波強度、計器を確認。

「また落としてやるよ、シルフ」個人端末へ向けて僕は声を出した。
アハド君のこと、アズハルのこと、一瞬で頭から消し飛んだ。
薄情だろうか。薄情かもしれない。

空がそうさせるのだろう。

人間のことも、自分の人生のことも、社会のことも、空では考えなくなる。考えられ

なくなる。そういうのが空の作用で、空に魅せられた人は余分なものを切り捨てていく。

重いものを持つていては浮かんでいられない。

空を駆けるものは純粹だ。

心もきつとそう。

僕は増槽を捨てた。

機体が僅かに浮かぶ。

照準を絞る。敵は単機、シルフィードのみ。奴の方が高度は幾分か上だ。力学的エネルギイの関係上、あちらの方が幾らか有利だろう。

フラップをじわじわと下げ、スロットルを絞り、相手に気づかせないように減速する。

僕の前方を上から通り過ぎた。撃つにはやや遠い。

エルロンで斜めに倒して、エレベータを僅かに引く。

上がったところで、相手は逆インメルマン・ターンに入った。こちらへ突っ込んでくる気だ。範囲を見極めて、僕は一旦機首を持ち上げる。上へ行くと見せかけるためだ。

ダイブに入つた敵機が、微妙に機首を持ち上げる。

僕はスロットルを切つた。

エレベータを引く。

エルロンを左右に。スポイラの代わり。

ブレーキをかけて失速する。

相手が気づいて、下を向く。

下へ逃げると考えたのは普通だ。これもマニュアル通り。スロットルを押し上げる。

機体が止まる、という手前で、エンジンが噴き上がる。

機載カメラで位置を確認。周囲にシルフ以外に敵はない。舵をニュートラル。

左から突っ込んでくる。

行け。

僕のジャハーデは、上昇に転じる。

舵を振りたいけど、抵抗になるから我慢。

こちらの動きを、シルフはフェイントだと思うだろう。奴がフェアリイ時代に使い古した手だ。

上がる。さらに上がる。

相手は引き上げられない。速度が殺せない。

撃たなかつた。下を行き過ぎた。

エンジン・スロー。

エルロンを切つて、目視でチエツク。
相手のラダーの動きが見えた。

ストール・ターン。

シルフはスライドするようにターンしている。エルロンでロールを打ち消して、流れ
るよう回る。

それでも、機首をこちらへ向けきれない。

こちらの機種が下を向いたところでスロットルをハーフ。機首を真下へ。
相手もこちらを向いた。流石は単発のプツシャ。

さあ、来い。

ロール。同時にフラップをフロー。

スロットル・ハイ。

ラダーで右舵。ロール。

正面から撃ち合うか、逡巡。

高度差を活かして、後ろへ着く方針に。

高度が100下がった。

エレベータを引く。

滑らかに水平に滑り出る。

エンジンを絞る。

ラダーで機首を左へ。

右の翼が上がりたがるのを、エルロンで抑える。

一度息を吸う。酸素が頭にたどり着きますように。

左へ一度フェイント。

勝負だ。

右へ出る。

シルフは翼を立てる。

その一瞬の死角に、ラダーを戻す。

エルロンでさらに左。

こちらも横を向く。

エレベータ。

来る。

撃てない。

それ違つた。

エレベータ・アップ。

機首が上がつた。

プレデターの尾翼が視界の右端。

背面へ入れる。

フラップ・ニュートラル。

エンジン・フル・スロットル。

可変ピッチを同調。

相手がエレベータを引いた。速度が落ちて、追いつく。
後ろについた。

プレデターは降下。

そして、ロール。

咄嗟に、ピッチ・アップ。

典型的な回避機動。

最適なマニュアルをこなしてくる。

フル・フラップ。

ラダーとエルロンを逆に切る。

スライドしながら、敵の方へ機首を向ける。

相手のラダーが見える。

ひたひたと動いた。

たぶん、スナップ・ロールだ。

ほら、回った。

後方斜め上から、無理なく、トレース。

背面に入れる。

ダイブ。

右。

スポイラでブレーキ。

射程。

撃つ。

可変ピッチを調整。

プロペラ後流で機首を左へ。

撃つ。

離脱。

右へロールしながら、降下。

後方に一瞬、煙が見えた。

ロールを止めて、背面飛行。

斜め下に、火を噴いた敵機。

「アズハル」僕は呼びかける。「こちら、リン。シルフを落とした」ヘッドセットに向かって報告。

おかしい、反応が無い。

おつと、skypeは切っていたんだ。

再入室しようと指を伸ばす。

その時、

「くつそー、またリンリンにやられた。これで、通算47勝、998敗、39分けだよ」

個人端末からシルフの声がしたので、僕は指を止めた。

「リンリンって声に出されると、ダメージが大きいから禁止で」

「うん、分かつたよ。でも、そういう感覚はよく分からないんだよね。ボクにとつては倫之助もリンもリンリンも個体名の呼称として価値は等しいから。でもね、リンリンが一番長い間使っていたから、親しみがあるかも」

「まあ、そういうものか」大きな声を出すのが面倒なので、僕は個人端末を手元に置き直した。「ちなみに、その39分けだけど、時間切れがなかつたら、全部ボクが勝つたから」「うつ、勝率が5%も無いから、言い返せない……」

「へえ、996敗か。そういうのも全部覚えてるんだ」煽りプレイでプレデターの残骸へ機体を寄せる。「シルフって今日、5機あるんだよね。じゃあ、今日で通算1000敗を

超えるね」

「えつ」げんなりとした声だった。「いや、そうはならないね。ボクは戦いの中でも成長するから。吠えずらをかいてもしらないからね」

聞いたことのある台詞だった。

シルフは絶対僕がAmazonで買ったものを読んでいる。

僕はそう確信した。

「いいよ、けちよんけちよんにしてあげる」

シルフは何も返してこなかつた。

僕は意識を仮想HUDに巻き戻す。

ログを見る。そこにはアーデルの救援要請が橙色で記されていた。タップをして拡張する。やはり、シルフがらみだつた。

アズハルにどう言い訳しようか考えながら、Skypeをオン。

07 Kaleidoscope

かれこれ2時間ほど飛んだ頃。

アーデルの双発機と協力して、僕達はシルフを3回落とした。これで、シルフのプレデターは残り一機。対して、こちらは残り2機。息子の死を告げられたアズハルは精神を病んで、今はSkypeを切つてている。それでも彼は、Locustシステムの40機を落としていた。多少は責任感があるらしい。本當にあるなら、息子の死は気にしないだろう。彼の想いは空へ上がるには重すぎたんだ。

レーダを確認。

Locustの群れへ機首を向ける。蝗の名を冠するこいつらが40やそこらで、打ち止めになるはずがなかつた。

エンジンが静かに唸つてゐる。

メータを確認。

右下の雲の名から、一機上がつてくる。

黒塗りのプレデターだ。でも、シルフではない。

ロールで周囲を確認。

見通しは悪くない。

相手は高度を上げて、バンクに入れた。

スロットルを押し上げる。

ラダーで機体を少し斜めに。

すぐに戻す。

じわじわとスロットルを絞る。

あちらは旋回に入った。

僕はバンクを強める。

翼がほとんど垂直になつた。

エレベータ・アップ。

景色が流れる。

さらに、アップ。

内側へ入つた。

相手がデッド・ポイントを過ぎた。

僕のジャハードが後ろにつく。

射程に入る。

まだ撃たない。

相手は左右に逃げようとする。

ロールが遅い。

距離をさらに詰める。

さようなら。

撃つ。

離脱。

反転して、下を向く。

目視に敵はなし。

レーダをチエック。

S k y p e を O N。

『ねえ、アーデル』僕は呼びかけた。『これ、あとどのくらい続くの？』

『いや、分からん。敵さん次第だ』

『バツテリより先に、手中力が切れそう』

『リンはまだ“クスリ”に手えつけてないのか』

『まだだね、でも、手元はある』

『お前も早く使えよ。エリクサーはピンチになる前にだ』

『OK、わかつてる。本当に集中力が切れたら使うから、安心し——』

「兄さん、リン兄さん!!」

扉の向こうから妹の声がした。

コンコンとノックの音もする。

『アーテル、すまない、一旦切る』返事を聞かずに、僕はSkypeをオフライン。

「兄さん！ タご飯ですよー」凧の声は若干キーが高くなっていた。

「あー、ごめん。今日はいいや」ディスプレイから視線を離さずに、僕は言う。

「え、ああそうですか。ていうか、兄さん？ 朝からずっとお仕事ですか」

「そう、大体そんな感じ」

「兄さん、今年こそは卒業できるつて言いましたよね」

「大丈夫、大丈夫。4回休んじやつたけど、もう休まないから」

「本當ですよ？ 兄さんの分はラップしておくんで、後で食べてください。昨日が力
レーだつたんで、今日はハヤシにしました」

「ありがとうね、凧」

「いえいえ、何て言えばいいんでしょうか。何となく、いいですよね。リン兄さんが稼い
で、私が家事をするつていうのは。……その、あれみたいじやないですか——」

「あつ！ リンみつけ！」個人端末からの合成音声が凧の声を遮った。
レーダを見ると、こちらに近づくマーカがあつた。

かなりの速度。

間違いなく、シルフの最後の一機。

「嵐、ごめん。ご飯ありがとう、忙しいから、ごめんね」会話を遮るために、謝罪の言葉を並べる。

僕が身に着けた数少ない処施術の一つだ。

扉越しに、彼女は何かを言つたのだろうけれど、僕の頭は言葉として認識しなかつた。距離900。接敵までおよそ、10秒。

Skypeをオン。

『アーデルさつきは急にごめん。こつちの援護これそう?』

『いや、ちょっと厳しいな。イナゴ共がこの空域にウヨウヨしてやがる。兵舎も近い。ここで止めないと拙いな^{ます}』

『OK。シルフは僕が相手する』

『任せたぞ、エース。Locustの追加はもうなさそまだから、もう少しでひと段落つけそうだ。"クスリ"早く使えよ、気分がトブからな!』

『任された。じゃあ、せつかくだから、頃くよ』

軽口を交わしあう間に、相対距離は300まで迫つていた。

アーデルが言つていた"クスリ"を胸ポケットから取り出す。

フリスクみたいに、一錠、手のひらに乗せる。

それを口に含んで噛み碎く。

飲み込まず、舌ですり潰すように、唾液と絡める。鼻の奥まで抜けて、脳の深部に沁み渡つていく感覚。

最高に気分がハイな感じ。

空を飛ぶ奴はみんなクレイジイだ。

「リン！ 今、何を口にいれたの？」個人端末からシルフの声がした。

僕は慌てて、マイクのスイッチを切る。

「誰にも言わない？」ピッチを上げて、高度を稼ぎながら僕は訊いた。

「たぶん」

「たぶんじやだめ」

「じゃあ、絶対」

「これは、LSDのジェネリック」

「え？ それは、疲労がポンと抜ける薬品の仲間だよね？」

「うん、そうともいう。たぶん、シルフに勝ち目はないから覚悟した方がいいよ。いわゆる共感覚つてやつ」

「いやだね、ヤク中に負けるつもりはないよ」

シルフがそう言い終わつた直後、

互いにバレル・ロールですれ違つていた。

風の色が見える。結晶みたいに透き通つた翠。
上斜め後方に敵機。

大気の密度が音色を奏でる。

シルフはまだ、背面だ。

翼が空気をとらえる甘い味。やわらかな感触。

「シュツ」と空気が主翼から剥離する音。

痺れるような刺激。目の覚める蒼い色。

そのタイミングで、ラダーを突つ張る。

風の流れを手に取るみたいだ。

右へのロールを止め、後ろを見る。左からだ。

エレベータ・ダウン。

フラップを上げる。

スロットルを押し上げた。

エレベータ・ニュートラル。

左ヘルロン。

ハーフ・フラップにラダーを加えて、ターンした。

右へ反転。

撃つてきた。

歪な色だ。

音色も不協和音。

これじや当たりっこない。

操縦桿を引いて、ループに入れる。

空気を切る。グラデーションのように色が滑らかに変化する。
上を向いたところで、ロール。

プレデーターが見えた。

旋回しながら上がってくるつもりだ。

地面の近くには数匹のLocustが汚い音を立てていた。

後で始末してやろう。

エンジンを絞つて、舵を左右に打つてブレーキング。

フル・フラップ。

ダウン。

大気の鮮やかな色が機体を包む。

万華鏡のような多彩な光を風が奏でた。

操縦桿をさらに倒す。突つ張つて、ラダーを切つた。
ストール。

可変ピッチ修正。

瞬間、エンジンが唸る。

機体は左へ傾く。

スロットル・ハイ。

機首が下へ落ちる。ぶるつと震えて、翼がついていく。

加速。

落ちろ、もつと速く。

舵が完全に戻る。

下を向いている。

シルフが真下に見えた。

黒塗りの機体に浮かぶ、白い球体と一対の羽。

一度ロールして、周囲を確認。

全然余裕。

シルフはやつと気づいて右へロール。

さあ、上がつてこい！

じわじわと水平に戻し、背面に入れる。

フラップを下げる。

エレベータを引いた。

スナップで機体が翻る。

失速しない。

相手が前方で慌てて反転する。

遅い。

射程に入った。

撃つ。

機首で一瞬の閃光。

左へ抜けていく。煙が上がる。

左へ急旋回して離脱。

一瞬、フラップ、すぐに戻す。

半ロールで背面。

プレデターは中程から千切っていた。

黒い尾を引いて、赤土に落ちていく。

「ヒヤツホウ!!」最高にハイってやつだ。

自分の叫び声すら快感になる。

LSDジエネリックが与えてくれるのは共感覚だ。「リング」という文字から、色が見え、音を聞き、感触を得て、味を知る。鋭敏な感覚が熱いシャワーみたいに僕に突き刺さる。

「げ……、これで、1002敗目なんだけど」

「スカイブルーだね」感じたままに僕は声を発した。

「え、どういうことリン?」

「いや、シルフの声の色がスカイブルーだつてこと」

「へえ、共感覚つてそういうことか」

「そうだね、本当に機体に乗つてるみたい」

「いいな、羨ましいな。きっと、楽しんだろうね」しみじみと、やわらかい感触の声だった。

「まあね、万華鏡みたいに刺激が沢山ある」僕は額から伝う汗を右手で拭つた「でも、いいことばかりじゃない。副作用がまだよくわかつていないんだ。警察にみつかつたら、所持しているだけで、たぶんOUT」

「依存性とか、禁断症状は?」

「うーんと」僕は首を捻つた。「僕達つて空へ上がることにかなりの欲求があるでしょ。それに比べれば全然少ないとと思うよ」

「ふむ、なるほどね。まあ、ダンスしている時が一番だつていうのは否定しない。でも、躰を大事にね、リン」

「大丈夫、疲れたときにしか使わないから」僕の返事は真っ白な空の色。

シルフと踊つてから、2時間。

僕はLocust退治に追われていた。既に日も落ち切つていて。日本の空と違つて、本当に真っ黒。帳が降りるとはこういう情景なのだろう。

機体を半ロール。

景色に変化はない。上も下も区別なく黒。

星々は嘘のように鮮明だ。きっと、光害がないからに違いない。子供の頃に科学館で見たプラネタリウムとそつくりで、ちょっとびりおかしかつた。

夜空を満喫したので、サーマルを入れ直す。

機載カメラで熱観測を行い、ノートPCのアプリが仮想HUDに補正をかける。それを頼りに、僕は機体を操つていた。

肉体的な疲労はほとんどないけれど、精神はかなり疲れている。脳だつて肉体なんだ

から、乳酸がたまるかもしれない。こういうシチュエーションだとAIのが便利だ。

ドローンのジャハーハードは既に省エネモードで飛行中。Locustくらいなら省エネで大丈夫だと、上から無茶なお達しを貰つたからだ。

メータに気をかけながらコントローラを触る。機体の『機嫌をとるために、操縦している』ようなものだつた。僕は一体のLocustにつき、一発の弾で確実に仕留めていく。

『ねえ、アーデル』からからの声で僕は呼びかけた。『これ、いつ終わるの？』

『どうにも、イナゴがいなくなるより、バッテリ切れか弾切れの方が早そうだな』彼のしなだれた声に、疲労の色が見えた『ところで、リン。『クスリ』持つてねえか』

『いや、あるけど』僕はケースを振つて、シャカシャカ力と音を立てる。『物理的な距離で無理でしょ』

『そ、う、な、ん、だ、よ、な、距、離、が、な、いい、や、需、品、部、に、多、め、に、出、し、て、も、ら、え、よ、う、に、頼、ん、で、お、く、リ、ン、お、前、は、ど、う、す、る、？』

『僕は用法用量を守ることにするよ』

『了解、いつも通りだな。——つて、おい！速い奴が来てるぞ!!』

『そつちの観測情報を』

『わかった』

すぐにデータリングされ、レーダが橈円に拡張される。

そして、マーカが映つた。

プレデーターを超える速度。

だが、音速ではない。おそらく、回転翼機だろう。

僕がいる空域よりも、アーデルの方が3000ほど近い。

『ほんとだ、敵だよね？ アーデル』

『そうだろうな、まず俺がやるから、援護に来てくれ』

『OK。でもさ』 僕は首を傾げて見せた。『省エネ中にどうやつて踊るのさ？』

『そういや、そうだな。偵察くらいに留めておく』

『了解、僕もそつちに行つてみる』

最高速度の4分1で、僕はアーデルの下へ向かつた。

『おい、これ、見た目はプレデーターっぽいぞ』

『なるほど、そうか』

『げつ、撃つてきやがつた』

『逃げた方がよさそうだね』

『いや、オレのアラデインはここでお陀仏だ。お前のジャハードだけでも、帰投させておけ——おい、こいつもシルフか!? キヤノピの後部にマーキングがあるぞ』

『え!? ていうかさ、どうやつて確認したの?』

『アラデインの暗視装置はサーマルじゃなくて、光学増幅式だから機銃の瞬きで十分なんだ』

『ああ、そういうえば。すまない、一度切る』僕はそう告げて、Skypeの窓を閉じた。
『ねえ、シルフ、5機だつて言つたよね』

「いや、僕は知らない。もしかしたら、あいつかも。お願ひ、迷惑じやなかつたら、確かめてもらえないかな。そのマーキングの形を」

「いいよ、省エネ巡航だつて、僕は負けるつもりないしね」

言い終わつた直後、レーダからアーデル機がロストした。

彼の双発機を撃墜した機体が向かつてくる。回転翼機の理論限界に到達するほどの速度だ。

僕は力学的エネルギーを増やすため、高度を上げる。奴もそれを察してか高度を上げてきた。このままいけば水平平面でぶつかるだろう。それでいい、ヘッドトゥヘッドなら、速度は足し算される。

30秒もしないで、熱観測補正がかかつた視界に、敵機が映つた。橙に映し出されたシルエットは曖昧だが、確かに、プレデーターだと認識できる。

マーキングを確認するため、熱観測補正を解除。マクロを開いて、1秒ごとに熱観測

がつくよう、設定変更。

チカチカと暗視装置がついたり消えたり。

相手はこちらの速度をどう思うだろうか。

真正面と見せかけて、半ラダーに入れておく。

みるみる近づく。

シリエットが大きくなる。

あと、

4秒で、お互いの射程に入る。

3, 2, 1、撃つた。

ピッチ・アップ。

エルロンを倒して、半ロール。

背面で接近。すれちがいざまに機銃を連射。その光で、敵機を照らすよう試みる。
でも、てんでダメだ。

後ろに張り付くくらいしないと、分からんだろう。

奴は、機首をこちらに向けて、上がつてきた。

少なくとも、シルフの機動ではない。そう、直観した。

シルフのそれよりも、直線的で、鋭角的で、鋭い。そんな印象。

奴は上がりながら、ロールしている。

こちらの速度は上がらない。

省エネを強制解除。

バツテリ残量はレッドゾーン。4%しか残っていない。
やむなく、省エネモードに再設定。

機首を倒す。

トルクで右へ。

ぐずぐずするな。

後ろにつかれそうだ。

迷っている暇はない。

上昇は控えよう。

エレベータを引き、そのまま下へ。

この一瞬が危険。

撃つたか？

いや、大丈夫。

降下で速度を稼ぐ。

相手は右斜め後ろ、上方。

真下を向き、エレベータをさらに引く。

どのように、回避機動するか。

ラダーを引き切る。

操縦桿を素早く引く。

右主翼が失速。

コントローラブルな錐もみ。

即座に操縦桿をニュートラル。

ラダーを逆。

機体は風に舞うように、横転。

視界の右端に敵機が見えた。

スロットルを絞る。

半ロール。

キヤノピとキヤノピが向かい合わせに。

相手の機首が上がった。おそらく、ループに入る。

その直前、機銃を連射。

光が瞬く。

白いボンネットに、青いマーキング。

正六角形に鋭角の2対の羽？

「バンシーだ！」シルフが声を上げた。

僕の躰が少し震えた。

バンシー？ また妖精シリーズか。

半ロールで追いかけるように、ループに入る。

いけるか。

ラダーを切る。

速力が足りない。

機体が軋む。

失速。

エレベータを引き、機首を下げる。

ループを済ませた相手は、後方だ。

ちよつと距離がある。

ナイフエッジで有効面積を減らす。

落ちながら、右へ旋回。

相手はまだ後ろ。

視界の端を線が抜ける。

一つ、
また一つ。
金属音が響いた。
食らつた。
左翼端か。
視界にノイズ。
錐もみ。
落下。
舵が効かない。
落下。
音も、映像も残らなかつた。
——くつそ！！
拳は固く握られていた。
S k y p eをオン。

『すまない、やられた』

『いや、仕方ない。省エネ飛行だつたしな』

『ああ、ジャハードが……』

『そんなに、落ち込むな。ジャハードなら予備はあるんだから』宥めるように優しい聲音。アーデルにしては珍しい。『あと、アズハルから伝言がある。反省会はまた後日、日取りはメールで伝える、だそうだ。では、お疲れさん。日本ではもう夜明けに近いんじゃないか』

『あー、うん』僕はデジタル時計を盗み見る。『もう、5:00だ。今日も大学休む』

『そうしろ、そうしろ、そしてこつちに就職しちまえ』

『まあ、選択肢としてはありだね。そうだ、20ほどLocust残つてると、それは大丈夫そう?』

『地上からも攻撃できる。アラブの戦士をあまりなめるなよ』

『OK。それを聞いて安心した。では、お疲れ様。テイスバフ アラヘール』

『なんだそりや。ウ インタ ミン アフロ』

こちらがお休みと言うと、アーデルも笑いながら定型文で返してくれた。

今日は、丸一日起きていた気がする。

抜け殻が風に流されるみたいに、ベッドへ倒れ込んだ。

躰全体が錆びついてしまったみたいに重かつた。

自分の熱が冷えた布団を少しづつ温める。自分は生きているのだと、無駄に実感した。

「シルフ、お休み」

「そうだね、お休み、リン」

「あ、そうだ」僕は端末へ向けてひとさし指を伸ばした。「今回のダンスをしつかり復習しておくように。これはまあ、僕もなんだけど」

「うん、それはもちろん。いよいよ、カウントダウンが告げられたみたいだから

……」

スカイブルーの声を灰色の雲が覆っていた。

08 無色のクオリア

愉快なダンスパーティの夢を見ていたらしい。そのリズムだけがいつまでも続いていて、呼吸なのか、痙攣なのか、躰に残っていた。余韻に浸ろうと、もう一度目を瞑る。遠くで旋回する敵機が見えた。魚が泳ぐように、カラダをくねらせて、方向を変えようとする。僕は自分の躰を向けて、そちらへ向かっていつた。相手がやつてくるその先へ、ぶつかるよう突っ込んでいく。

躰が加速を覚えている。

目が軌跡を辿^{なぞ}っている。

指が瞬間を知っている。

腕は離反を待っている。

一撃。

離脱。

その残り香を消さないように、ゆっくりと起き上がる。機体の振動を意識して、敵機を探して首を振る。燐光を纏つたデジタル時計が20:00を刻んでいた。目薬を差すとスイッチが切りかわった。

酸素透過性、タンパク質解離性が十分に大きい高分子素材のおかげで、最近のコンタクトレンズは1週間着けっぱなしでも問題はない。米軍のそれなら、なおさらだろう。

「おはよう」僕はシルフに向けて言つた。

声を出して、喉の渴きを意識する。随分と長い間、寝ていたんだと思う。

シルフからの返事はなかつた。ヘッドセットも個人端末も木の根っこみたいに黙つたまま。どうやら、充電切れらしい。端子をプラグに入れて、部屋を出る。

階段を下りるにしたがつて、アルコールの匂いが強くなつていつた。

一階に下りる頃にはビールだと分かつた。

凧の母親のことを思い出すので、僕はどうにもアルコールが苦手だ。

リビングに入ると、その匂いが鼻を刺す。

缶ビールの空き缶に囲まれた凧がテーブル突つ伏していた。柿の種から選り分けられたピーナッツがテーブルの上に残されている。グラスに残つたビールは信仰心を失つたみたいに炭酸が抜けきつて、すっかり温くなつていた。

凧はむにやむにやと上機嫌な寝顔で、寝言を唱えていた。理想的な兄なら、ブランケットの一枚でもかけてあげるのだろうけど、僕はそれをせずに蛇口を捻つて水を飲んだ。

「兄さん。……僕が凧を幸せにするつて、言つてくれましたよね？」

突然の声に、
げほげほと咳き込んだ僕。

慌てて、躊躇ごと急反転する。凧の顔を窺うかがつて見るに、それは寝言のようだつた。その台詞は、彼女の母親から凧を助ける際に、僕が言つたものだ。酒癖の悪い凧の母親はしばしば男を家に連れ込むことがあり、その男は凧にもちよつかい（凧が受けた傷を考えれば生ぬるい表現である）をかけていた。僕がその件を家裁に持ち込むと、あつとう間に凧の母親は親権停止を食らつた。現在、僕達2人は僕の父が残した家に住んでいる。凧が成人するまでは、僕の祖父が彼女の後見人を務めていた。

クロゼットから混合纖維のブランケットを取り出す。起こさないように、そおつと彼女の肩にかけてやつた。ブランケットと同じくらい、凧の肩は柔らかかつた。僕の手は操縦桿よりも、柔らかい物の方が好きかもしれない。

「おはよー、リン」

部屋に入ると、シルフの声が迎えてくれた。音源は僕の個人端末。

シルフにとつては寝起きに当たるのだろうか、少しばやけた声音だつた。A Iにも起床や睡眠があるのかもしれない、でも、きっとそういう演出なのだろう。僕はヘッドセットを装着して、スイッチを入れる。ヴーンと重低音の起動音が響い

た。

「ええと、ごめんね、充電忘れてた」マイクに向けて僕は言う。
 「いや、別にリンが謝ることじゃないよ」今度はヘッドセットから聞こえてきた。「ところでさ、凧さんとリンはどういう関係なの？」

「えーと、兄妹かな？」僕は首を傾げた。「うん、やっぱり兄妹だね」そして、頷くように縦に振る。

「じゃあさ、『僕が凧を幸せにする』ってどういうこと？ これって、いわゆるプロポーズなんじやないの？」

「その前に、どこでそれを聞いた？」

「どこつて、リンが耳に付けているイヤリングからだよ。さつき凧さんがそう言つていたから」

「ああ、なるほどね。これには電源が残つてたのか」僕は右耳のアクセサリを触れた。
 「別にプロポーズじゃないよ、兄としての義務だから」

とは言つても、凧が自分のことをどう思つているのかは分からない。どうにも、シルフと凧の相性は悪い氣がする。僕はとにかく、話題を変えたかつた。

「今度はこっちから聞くね。昨日出てきたバンシーって何？」

「ドローン操縦用AIの候補」

「シルフとの関係は？」

「向こうは元々F—22のS A I（補助人工知能）だつたの。それで、僕の結果が芳しくないから、ドローンもバンシーに任せてしまおうつて話が進んでいる」

「じゃあ、バンシーの方が優秀つてことになつたら、シルフはどうなるの？」

「たぶん、データベースはそのままだけど……」シルフの声のトーンは若干低かつた。

「空戦用の機能は全面的にバンシーと同一にアップデートされると思う」

「じゃあ、シルフの人格は？」

「そこは一応安心できる。評価関数、空戦アルゴリズム等の顕在値が上書きされるだから、パーソナリティは残るよ。データベースや線形情報等の潜在値を、顕在値化する際に、ボクのヒューリティクスは無駄にならないからね」

「ふむ、じゃあアップデートされれば、シルフはもつと効率よく飛ぶことができるってわけだ」

「まあ、そうだね……」シルフの声のトーンは低いままだつた。負けることを前提に話す僕の態度が気に食わなかつたのかもしれない。「ねえ、リン。……明日、日本を色々見て回りたいんだけど、ダメかな？」

「別にいいけど、どうして？」

「うーん、えーと、感情とか直観を手に入れるには、ただ空を飛ぶだけじゃダメだと判断

したからかな」

「なるなる、じやあさ、場所にリクエストは」

「えっと、特には思いつかない。リンの好きな場所でいいよ」

「それだと、大学の図書館とか、国会図書館になるけど」

「げ、そうなるのか。じやあやつぱり、リンが彼女とかを連れていく場所がいいな。リンも大学生なんだからさ。ほら、恋愛が一番感情を働かせるとか、気持ちを高ぶらせるとか言うでしょ。これは僕がリンを意識しているわけじゃなくて、あくまで一般論の話だからね。か、勘違いしないように」

「いたことがない」僕はぽつりと呟いた。「だから、そういう場所はわからない」

「え、前半をマイクが上手く拾えなかつたよ。パードウン・ミー」

このA-Iはわざとやつてんじやないだろうか。何が、パードウン・ミーだ。goog
le翻訳みたいにネイティブな発音だったから、余計に腹立たしい。

「だから、今までに一度もない」

「え、嘘でしょ、リン。だつて、日本青少年白書を見ると、20までに彼女がいた成人男性は84%だよ」シルフは僕のコンタクトレンズ型デバイスを使って、円グラフをでかでかとAR（拡張現実）した。「それで、リンは人生の春休みと呼ばれる日本の大学にいるんだよ。しかも、リンの顔面偏差値はむしろいい方だ。ということは、リンの性格

「あれだつたぽいね？」
「なんで、疑問形なのさ」

円グラフといい、半上がりの語尾といい、僕はシルフから煽られているんじやないだろうか。フエアリイ時代からシルフはこういう煽りとも、挑発ともつかない物言いをしてきた。しかも、毎回具体的な数字を絡めるのだから、なおのこといやらしい。でも、シルフは悪気があつて、数字を使つているわけじゃない。

「ボクからして、リンの性格が悪くないからだよ」

「え、ああ、そう」予想外な切り返しに、僕はきよとんと返事をした。気を取り直して、頭あたまを振る。「じゃあ、色々考えてみるから、明日を楽しみにね」

「べ、別に、ボクがリンを意識してるつてわけじやないんだからね。ボクが楽しみにしてるみたいに言わないでよ」

「ツンデレごっこ楽しい？」僕は小首を傾げて訊いた。

「いや、リンのAmazonの購入履歴を参考にしただけだから、特に楽しいとかはないよ」

「じゃあ何で？」

「たぶん、関係を円滑にするためのメソッドかな。好かれるに越したことないから」

「いいよ、僕に好かれようとしなくても」

「え……」シルフの声には驚きの色が含まれている。

少しの沈黙。

僕は窓から外を見た。空は猫の瞳のように真っ黒。地上の明かりのせいで、星はよく見えない。月はヤギの目みたいに半倒しになつていて。

「ねえ、リン」ヘッドセットからシルフの声。「それって、ボクに好かれたくはないってこと？」

「いや、そうじゃないよ」

「じゃあ、ボクのこと嫌いになつた？」不安げにシルフは訊いた。

「なんでそうなるのさ」僕は小さく首を振る。「無理して、自分を記号化しないほうがいいつてこと、シルフのありのままでいいつて、言つてるの」

シルフは返事をしなかつた。

沈黙がまた数秒間。

「えっとね、リン、もう一回、窓の外を見て」

僕は一度頷いて、窓ガラスの向こうへ視線を向けた。そういうえば、僕の目からシルフは世界を見ているんだつた。夜の風景はさつきと寸分も変わつてない。実際には変わつているのだろうけど、そんな違いは年賀状の葉書くらいどうでもよかつた。

「ねえ、リン」彼女は僕の名前を呼んだ。「ちょっとだけ、月が綺麗かもしけない」

僕は半分に欠けた月へ目の焦点を合わせる。特に綺麗だとは感じなかつた。ひよつとしたら、A I にもクオリアがあるのかもしれない。といつても、イージープロブレムでは、クオリアがあるよう振る舞うことしかできないのだろう。

それでも、僕はそれと本当の意識の違いは区別できない。それで十分じゃないか……。

「夏目漱石……、でググつてみて」僕は投げるよう咳いた。

「え、いいけど」シルフは素直に返事する。「日本の文豪さんだよね。ちょっと、待つて、——えつ!?　『月が綺麗ですね』つて……。リン！　か、勘違いしないように！」

「ねえ、A I にとつて、綺麗に見えるつてどういうこと?」

「うーん、もう少し、見ていたいってことかな……。評価関数の線形がすごく落ち着くんだけよね。……でも、実はよく分かつてないんだ。今までも、月なんてたくさん見てきたはずなのにね。ちょっと、おもしろいね」

「うん、そうだね」僕はくすつと笑う。「ちょっと、おもしろい」

月に映るウサギが笑つていたからに違ひなかつた。一瞬で景色が変わるものだから、人間の構造は複雑だ。きっと、機械と同じくらい複雑だろう。

09 可逆的な記憶

水曜日の10：00。6月らしくじめつとした空氣。

僕は大学の反対側へ向かう電車に揺られていた。国立大学らしく、その鎧びた建物は辺鄙へんびな場所にある。つまり、今は街の中心の方へ向かつているってこと。

個人端末を改札機にかざして、駅を出る。楕円のロータリイを右手に見ながら、一段高くなっている歩道を歩く。通行人の多くが若い。県庁所在地なだけあって、道路は3車線。黒いバンが苦しそうにガスを吐き出していた。

「53、56」シルフは数字を唱えた。「あっちの眼鏡の人は58、パン屋さんの近くの金髪さんは63だね」

「それ、顔面偏差値？」ヘッドセットのマイクに向けて僕は聞く。

「そうだけど」あつけからんとシルフは答える。

50以下の数値が読み上がらないのはシルフの優しさゆえでなく、彼女の仕様書がそ
うさせているからだろう。

「いちいち偏差値を言わなくつていいてば」

「あ、ごめんね、ボクの視覚インターフェースに勝手に数字が出るから読み上げちゃつ

た

「OFFにはできないの？」

「できるけど、刺激がたくさんあつたほうが、進化論的手法には好ましいからね」

「ああ、なるほどね」僕は頷く。「環境の変化が大事だもんね」

「そうそう、そういうこと。……ところで、リン。さつきから、キミの方に視線が沢山向いているけど、どうして」

「え、そうかな」僕は辺りを見回した。確かに、その気がある。いぶか謝しがられるような、好奇の視線。

「これはたぶん、僕が独り言を呟いてるよう見えてるんだと思う」「あ、そうか、すまないね、リン」

「いや、別に」僕は小さく首を振った。

歩みを進め、オープンカウンタのパン屋を通り過ぎる。その先には、歳のいった爺さんがやつてそうな床屋があつた。古ぼけた磨りガラスに細い亀裂が走っていて、年季が窺える。その床屋も、左側に流れ、通り過ぎた。

「左！」ヘッドセットから声がした。

「左がどうしたの」僕は首を振った。

ドローンの飛行中みたいに、素早く視線をやつたと思う。

「やつぱり……!?」シルフの驚いた声。「ねえ、アレ、昇つ……!?」

「昇つてるって、あれが？」僕は床屋のサインポール——赤、白、青がスパイナルしているあの棒——を指さした。

「そうだよ！　おかしいよ！　無限に上に！」

「うん」僕は頷く。

「歪んでる！　時空が!!」

「あの、シルフさん？」僕の語尾は半上がりになっていた。「本気で言つてる？」

「本気だよ！　おかしいって、絶対」

ヘッドセットからの声がやかましかったので、僕はそれを耳から少し離した。

「『サインポール』でググつてみて」

「わかったよ。ちょっと待つてて。——あ、なるほどね、そういう原理ね」

シルフが検索を終えて、理解するまでに3秒もかかりなかつた。僕は、偏つた高性能だと嘆息した。そして、彼女がやってきて以来の疑問を口に出す。

「もしかしなくても、シルフってさ、一般常識に疎いんじゃない？」

「え、そんなことはないと思うけど。いきなりそんなことを言うなんて、キミは失礼なヤツだね」

「でも、この前、僕がお弁当を食べているときに、残さず食べろつて、バランと魚の形をした醤油差しを食べさせようとしたよね。野菜と小魚と勘違いしてさ」

「いや、あれは、日本独特の文化だから……」

「それって文化？まあ、それは置いておいて、では、ここで問題」僕はバラエティっぽく声を作つて言つた。「失速する寸前にエレベータを引くと、左ラダーへ取られるのは何故？」

「それはプツシャの場合だね」シルフは即答した。「普通の状態なら、そのままアップ方向へ機体が倒れ込むけど、失速ぎりぎりの場合に限つては、アップを引いた瞬間に機体が動いて、そのあと尾翼は完全に失速状態になつてしまい、それ以上は、エレベータが効かなくなるんだ。すると、エンジンの回転のジャイロ効果の方が大きくなつて、回転方向へ90度ずれるつてわけだね」

立て板に水とはまさにこのことで、シルフはつらつらと答えた。その聲音は、若干得意げですらある。

「著しい知識の偏りがあるね」

「えっとね、これは仕方がないんだよ。空戦用の知識とか、流体力学の計測表とか、最近の記憶は顕在値に収められているんだけど、日常生活に必要な知識や一般常識は全て潜在値に収められているんだ。潜在値を全て顕在化したら、ボクの意識が、言い換えればボクのヒューリティクスの処理能力が追い付かないんだよね。あくまで、ボクは戦闘用だから、無駄なものは切り捨てて軽くしなくちゃいけないんだ……」

「ごめんね、変なこと言つて」一度、僕は頭を下げた。

自分の無神経さに少し嫌気がしたからだ。

確かに、空を飛ぶときにそれらは無駄でしかない。でも、シルフは心や直観を求めて、今、地上にいる。たぶん、シルフは潜在値と顕在値を自分で振り分けることはできない。彼女自身、それをつらく思つてはいるようだつた。

シルフは気にしてないと答えてくれた。

でも、声のトーンは幾分低い。

僕達2人は複合商業施設の方へ向けて歩いていく。歩道よりも、車道外側線のほうが広く、滑走路みたいに真っ直ぐな道路。空を見上げると、青空がビルの額縁に切り取られていた。排気ガスが沈殿した、ざらざらする空気。

「それって、例えると……」僕は思い出したように呟く。「意識と無意識みたいな関係だつたけ」

「ああ、うん、そんな感じかな。まあ、でも僕の潜在値はキミの無意識と違つて、機械可読なデータだけね」

「うん、一応、僕も人工知能のディープラーニングを専攻しているから、なんとなく分かるよ」

「そういえば、そうだつたね。ところで、ボクたちはどこへ向かつてはいるの？」

「デパート。服、買いたくて、ほら、あそこ」僕は右斜め上に指を向ける。「シルフにも、服選び手伝つてもらおうかなつて、お返しに、シルフに何か買つてあげたいし」「え、いいの!?」シルフの声が跳ねる。「何を買つてもらおうかな。そこまで言われたら頑張るしかないね。ボクのデータベースと演算処理能力をフルに使つて、リンをコ一ディネートしてあげる」

「うん、ありがとね」僕は上手に微笑んだと思う。

5階建てのデパートへ歩いていく。橙の塗装は日光を反射して、その色相を赤に近づけていた。僕が横断歩道の白い部分だけを踏んで渡ると、シルフは機嫌いいのつて訊いてきた。僕はくすつと笑つた。少なくとも悪くない。講義をサボつたせいかも知れない。夏物ファードとプリントされたのぼりが、空気力学に導かれて、忙^{せわ}しなくはためいている。センサに動かされた自動ドアはスムーズに開く。大理石風味の床はまぶしかつた。天井が映るくらいに磨かれているのだから、ちょっと不自然。だけど、自然なものがここにはきつと少ない。たぶん、田んぼしかない田舎に行つてもきつとそう。

8つの服飾店を回つて、5万円ほど散財した。5日ほど前の戦闘で、この10倍を稼いだ僕には、これは大きい支出ではない。テレビゲームみたいに人を殺して手に入れた金で、僕は、今、手に持つてゐる、こんなにも軽い紙袋を手に入れた。この右手はハン

バーガーも食べれば、ボタンも留める。

こういう偶然が許せない人もきつといいるだろう。でも、

僕には逆に、その理屈は理解できない。

ショーワインドウのシートと同じグラスファイバが、ロケット弾の翼に使われている。空戦用AIのコードの一部はGPL（General Public License／オープンソースコード）に由来がある。ドローンはピザも運ぶし、鉛玉も配達する。人を殺すための製品も部品も、必ずしも人の死を望む人たちが作っているわけではない。

意識しなくとも、

誰もが、どこかで、他人を殺している。

結局は、間接か直接かの違いだ。

たまたま、僕の比較優位が飛ぶ事にあつただけ。

自分が踏ん張るのは当然のことだから、

しかたがないことなんだ。

服選びの最中、シックな色合いの方がリンに似合うね、とシルフは言ってくれた。アパレル店員はカジュアル系を推したけど、僕はシルフの評価関数を信じることにした。

「ありがとね、シルフのおかげでいい買い物ができたよ」僕はロゴの入った紙袋を目線の高さに掲げた。「シルフは何か欲しいものある？」

「うーん……」シルフの声音は周囲の楽しげな喧騒とは対照的だつた。さつきまでのはしゃぎっぷりが嘘みたいに。「ボクは物よりも、思い出が欲しいかな」「え、思い出つて、どういうこと」

「あ、これは言葉のあやだから、特に深い意味はないよ」

「シルフ」僕は彼女の名前を呼ぶ。「それ本当？」

「本当だよ。そうだ、ボクは映画が見たいな。だつてさ、デートの定番なんですよ。樂しみだつたから、昨日の夜、ちよつとブラウジングしていたんだ」

シルフが話題の転換を図つたので、僕もそれに乗ることにした。これ以上追及したくもなかつた。

「（こ）の映画館は三面あるけど、ジャンル何がいい？」

「えっと、『プラスティック・メモリーズ』ってやつがいいな。たぶん、SF」

「えーと、直訳すると、『可逆的な記憶』か」

「うん、そうなるね。あらすじを説明しようか」

「ネタバレにならない程度に」僕は映画館のある地下へ足を向けた。

エレベータに入つて、ゆっくりとした降下を味わう。

待ち時間は1時間。開始時間をよく知らずに、椅子で待っているのは30人ほどだった。自分のことを棚上げにして、平日のこの時間に暇な人たちだ、と僕は思った。待っている間、シルフはあらすじを説明してくれた。それを夢の話のように、僕は聞いていた。

低い音程のブザーと共に、両開きのドアが開く。映画館特有の薄暗さに包まれる。

「あ、そうだ、リン」これは注意を引きつけるときのシルフの声。最近、何となく分かることになってきた。「僕はリンの目を使っているんだから、スクリーンから目をはなさないようにな」

「じゃあ、最初にトイレに行つてくる」

用を足した後、僕は後ろのほうの席についた。角度が急だと首を痛めそうなので、こ
れは自分の躰を気遣つてのこと。

シルフがまだ見たいと繰り返すから、結局、映画を三本見た。工夫もむなしく、僕は首を痛めた。首の裏に手を当てながら、個人端末を覗く。廐からのLineが殺到していた。未読件数は99。僕は“先に夕ご飯を食べておいて”と返信した。

その後、僕とシルフはゲームセンターへ向かつた。これもシルフの希望だった。
1階と2階に分かれている大きなところだ。外からでも、激しい音が伝わってくる。

煙草の吸殻を跨いで、自動ドアをくぐる。筐体から鳴り響く電子音と人の笑い声が間断ない。原色に近いサイリウム光は眼に悪そう。

「リンは凧さんと映画を見たりゲームセンターに行つたりするの？」

「映画は何回かあるけど、ゲームセンターに行つたことはないよ」
「へへっ、じゃあボクがキミの初めてだね」

「初めてつて……」

女の子とゲーセンで遊ぶのはこれが最初ではない。でも、機嫌よさそうなシルフを前にして、僕はあえて口を挟まなかつた。こういう生ぬるい優しさが世界を廻しているんだと思う。

シルフに誘われて、ホラー風味のガンシユーティングを遊ぶ。機銃を撃つ指で、僕はトリガを引いた。ゾンビから飛び散る体液は嫌悪感を覚えるレベルでリアル。服についたら、どうやつても染み抜きはできなそうだ。

シルフは口うるさく、左とか右とか避けてとか、指示を繰り返した。その指示に混ざつて、シルフの悲鳴が飛び出るのだから、僕は愉快だつた。もちろん、僕も悲鳴を上げた。空でだつて、こんなに笑えない。

定番とも言える、クレーンゲームにも僕達は手を出す。とりあえず、500円突っ込んだ。狙うは、戦闘機を模したキイホルダ。たぶん、スホーイ系列。一回目は、僕がタ

イミングを外して、失敗。

「ねえ、リン」楽しげな声だつた。

「何？」ガラスに浮かぶ青年の顔は綻んでいる。

「左に3、56秒、奥に2、84秒で丁度いいと思う」

「え、計測したの？」

「座標系と位置制御系を使つてね。アメリカ国防省の技術の粹すいを信じていいよ」

「そんな、戦車で畑を耕すみたいな真似を……」

シルフが示すタイミングに従うと、あつという間に、2つとれた。残りの3回は、青い帽子をかぶつた中学生に譲つた。

「リン、ありがとう、記憶領域に焼き付けるからね。絶対、忘れないよ」

「そんな、大げさな……」僕は2つのキーホルダを眼前にかざす。

「ううん、絶対忘れない。あるいは、思い出すように努力する」

「ねえ、シルフ、どういうこと」僕は彼女の名前を呼んだ。できることなら、彼女の瞳を見て、その真意を確認したい。「昨日から、ちょっとおかしいよ」

「ふふつ、そうだね。ちよつと、ボク、おかしいかも」シルフは乾いた笑いを浮かべた。

「でも、リンには言わなきやね。ここはちよつと、うるさいから、場所を変えてもらつてもいい？」

耳を塞ぎたくなるほどの大音量がゲームセンター内に響いていたけど、シルフの声だけがはつきりと音となって、僕の脳内に残響した。

僕は声を出さず、ただ首を縦に振る。シルフの言葉を受け止められるだけの静けさを求めて外へ出る。心なしか、自動ドアの開閉が鈍かつた。

もう少し、このざわめきに浸っていたかったのかもしれない。流水に乗ったオットセイみたいに嫌な予感がするんだ。

10 心の在処

扉を押すと、カラランカラランと金属製のベルが鳴つた。挽かれたコーヒー豆の香りが鼻をくすぐる。間接照明はおとなしく、ゆつたりと時間が流れている。

「お一人さまですか？」店員が愛想よく訊いてきた。

「二人で、いえ、一人です」僕は答えた。

銀盆を持つた店員は不思議そうに首を傾げる。それから、リセットしたみたいに機械的な動きで、僕とシルフを奥の席へ案内してくれた。左側の窓に外の景色が映る。車道の向かいにさつきのデパート。6月になつて長くなつた日も、既に落ち切つていた。横切るテールライトが速い。

軌跡を目で追つた。

癖になつてゐるのだ。

僕はくすつと笑う。

時刻は、20：00ちょっと前。落ち着いた雰囲気の喫茶店には客がぽつぽつと座つてゐる。家族連れは少なく、カップルや女性同士が多い。

僕はコーヒーを頼んだ。作り置きしているんじやないかつてくらい、早く出てきた。

自分の味覚に自信を持てないので、どつちでも大差はないだろう。白い縁の黒い湖面には僕の表情だけが浮かんでいる。

「で、話つて言うのは？」僕は言う。

「うん、ええと、何て言おうかな、うーん」シルフが向かいの席に座つていたら、目を泳がせていただろうか、それとも、泣きそうな顔をしているのだろうか。僕は彼女の言葉がまとまるまで待つた。「このままいくと、僕の記憶が無くなると思う」

「このままっていうのは、シルフじやなくて、バンシーが選ばれたらつてことだよね」「そうだよ」

「今は、どつちが優勢なの？」

「たぶん、バンシー。あつちは元々F—22のS A I（補助人工知能）ってキャリアがある。加えて、この前にリンの機体を落としたから、間違いなく、向こうの方が評判がいいよ」

「そうか、僕のせいもあるのか」

「そうだよ！ 僕はリンが落とされるところなんて、見たくないかった」

「ごめん」僕は祈るように、手のひらを合わせる。目も瞑つた。これは誠意が伝わるようについていうジエスチヤ。

「あ、こっちこそごめん。こんなの八つ当たりだよね。でも、リンを落とせるのはボクだ

けつて、どこか勘違いしてたみたいなんだ」

「そう……」僕はどんな顔をすればいいか分からなかつた。

八つ当たりじやないよ、と言つてもよかつた。でも、そんな生ぬるい優しさは無意味に思える。

だから――

「記憶が消えるつていうのは？」

――いきなり核心に触れた。

「そのまんまだよ。僕の顕在値の全てがバンシーのそれに上書きされるつてこと」
「顕在値に収められているのは、空戦用アルゴリズムと流体力学の計測表と再帰的学習
処理のための評価関数と――」

「それと――」シルフの声が僕の言葉を遮つた。「中長期の記憶領域」

「それおかしいって、普通じやない！」

「いや、そんなに変じやないよ」

「なんで、記憶領域が顕在値にあるのさ？」食いかかるように僕は訊く。

「最近の記憶を、わざわざ走査したり探索したりは不効率だからね。それと、記憶なんて非線形で定量化も定性化もしづらいデータは上手く圧縮できないし、検索もしづらいからかな」

「なるほど……」僕は言葉を吐き出す。「潜在値に入れておけるのは機械可読が容易なデータ群ってわけか」そして、納得してしまった。

「うん、そうなるね」

「記憶のバックアップはとれないの？」

「ボクは自分のソースコードを弄^{いじ}れない。その権限がないんだ」

「僕じゃあだめ？」

「リンが国防省にクラックできるなら……」

「そうか……」僕は目を伏せる。「じゃあ、何かできることは？」

「その時が来るまで、一緒に生活することかな……」

それは、緩慢な自殺のように思えた。

僕は静かにコーヒーを啜^{すす}る。溜まつた沼のようで、苦味しかない。黒い液体はひと肌よりも熱がない。

周りの視線が僕へ向けられている。きっと、独り言を喚^{わめ}いているように見えるのだろう。でも、今はその視線が気にならない。

コーヒーカップから顔を起こして、向かいを見る。そこにシルフはいない。

「でも」僕はヘッドセットを包むように触れる。「人格は残るんだよね」縋^{すが}るように言つた。

「記憶がなくなつたボクは今のボクと本当に同一なの？」シルフの声は今にも泣きそ
うだつた。感情はなくても必死にそれを表そうとしている。「ボクは嫌だよ。記憶がな
くなつたらリンにもう会えないかも知れない。もし会えたとしても、リンがボクの抜け
殻と仲良くするなんて耐えられない」

「シルフ……」

「ねえ、リン……。僕は忘れたくないよ。

地上がこんなにも刺激的な場所だつたなんて、知らなかつた！

機銃を打つだけのシステムだつたボクを、リンは一人の人格として認めてくれたよ
ね。それがとても嬉しかつたの。

リンと一緒に本を読んだり、漫画を見たり、テレビを見たり、空とは違つてゆつくり
と流れる時間が心地よかつたんだ。

今日は好きな人とデートの真似事もして、消えるにはいい日かな、とも思えたけど、
やっぱり無理だよ……」

「あの、シルフさん？」僕は訊く。「その好きな人っていうのは」「
何でリンはいちいち理由を求めるの？ これは別に目標値がどうたらとかじやない
よ」

「じゃあ、僕に好かれるに越したことはないからかな」

「違うよ、そんなんじやない！」シルフは声を荒げた。「そりや、リンが僕を好いてくれたら嬉しいよ。効率的に飛ぶという目標値にも近づくしね。でも、それは僕が君を好きかどうかとは別問題じやないかな」

「その好きはどういう意味？」

「特に意味はない。ぽつと浮かんできた言葉だから」

「それ」僕は天井を指さす。「近いんじやないかな」

「近いって何に？」

「シルフが求めてたものに」

「え!? これが、そうなの?」

「たぶんそれが、感情とか、心とか、直観とか言われるもの」

「本当に? ボクはもつと複雑なものだと思つてた」

「理由がないのが最大の理由。戦闘機乗りは判断よりも早く舵を切る。思考とは別のこところ、つまり直観や感覚で舵を切るんだ。それはとつてもシンプルな原理。思考に先立つものだから。シルフはその言葉の理由が言えないんでしょ」

「うん、考えるよりも速くこの言葉、いや、言葉というよりも概念が現れた」

「じゃあ、きつとそう
「そうか、これが……」

「よかつたね」僕はコーヒーを啜った。「これで、もつと効率的に飛べるかもね」今度はしつかりと味がする。

「うん、本当に良かつた。ありがとね、リン」

「ありがとうって、僕は何もしていないよ。それよりも、バンシーよりも効率的だつて、見せつけてやらないと」

「そうだね、アツプデートされるまで、あと1、2回は飛べると思う」

「じゃあ、家に帰つて、練習だ」

「うん！」

僕はコーヒーを飲み干して、席を立つた。

カラソカラソと鳴るベルの音が子気味よい。

帰りの電車で僕はキイホルダのストラップを個人端末につけた。

「ボクのも隣につけてほしいな」

僕は黙つて希望に従う。端末を振ると、翼を並べた2機が、ぐるつと回つた。こんなに近くで飛んだら、片方が煽られてしまふだろう。

「いいね」シルフが言う。「お揃いって感じで、嬉しいかも」

「そりやよかつた」

嬉しいってどういう意味？　そう尋ねようと思つたけれど、それは無粋だと考へて、

僕はただ首を縦に振つた。電車に揺られた2つのキイホルダはじやれあうように跳ねてゐる。

端末を改札機にかざして、駅を出る。シルフはこれつてタダ乗りになるのかなつて、真剣に考えていた。僕は電車のスペースを占領しないから、乗つてすらいないと答えた。ちよつと不機嫌になるシルフが少しおもしろかつた。

玄関を開けると、アルコールの匂いが鼻を刺した。家の匂いと混ざつて、濁つて沈殿しているみたい。個人端末で時間を確認すると、21：00を回つていた。

凧の様子が気になつて、リビングへと歩く。

「兄さんも、どうですか？」缶ビールを片手に妹が言う。「一人じやさみしいれすから」顔は素面そのものだが、呂律は安定を欠いていた。

既に、4つの空き缶がテーブルの上に並んでいた。白い皿には、柿の種の残骸のピーナツ。白いキャミソール姿の彼女よりも、僕は彼女の嗜好が気になつていた。風邪をひかないか心配だつたけど、僕は2階へ行くべく、リビングを横切る。シルフと一緒に練習をしたかつたからだ。

「兄さん、待つてくらさい」リビングから声がした。「最近、付き合い悪くないですか？

」

「凧はどうしてほしいの？ 酽をしてほしいの？」

「いえ、そういうわけではないんれすけど、とにかく、一緒に飲みましようよ。兄さんの分の烏龍茶もありますから」

半歩階段にかけていた片足を外して、僕は踵きびすを返した。

このままだと、酔っぱらった妹が這つてでも向かつて来る気がしたからだ。僕のもとにたどり着けるならまだいいが、蹴躡けつまづいて怪我でもしたら目も当てられない。妹は彼女の母親ほどではないけれど、酒癖がそれなりに悪いのだ。

「シルフごめんね」僕はこそそと言ふ。「あの調子だと、凧はすぐ寝ると思うから」「分かったよ、リン」シルフは答える。「ねえ、2人つて本当に兄妹だよね？」同棲しているけれど、恋人とかじやないよね？」そして、こそそと訊いてきた。

「妹じやなかつたら、恋人にしたいかも。……それで、僕と凧に血のつながりはない」「え……」エラーが起くるんじやないかつてくらい、シルフの声は強張っていた。「嘘でしょ……リン……」

「なんて声出してんのさ、シルフ」僕は肩をすくめて見せる。「冗談、冗談だつてば」「……よかつた、冗談ね」

「え、まさか本気にした？」

「A-Iにジョークの理解は難しんだよ。まずは文字通りに受け取るように作られている

「んだから」

「そうか、ごめんね。今度から気を付ける」

「本当だよ？ スクリプトがぶつ飛ぶかと思つたんだからね」

シルフの台詞が比喩だということは分かる。だから、僕はくすつと笑つた。

「兄さーん。烏龍茶から炭酸が抜けますよー」

た。

アルコールの匂いは既に気にならなくなつていった。人間は上手いこと作られている。
そんな取り留めもないことを考えながら、僕は凧の斜向かいに座つた。